
L a s t G a m e

鼎都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Last Game

【Nコード】

N9158J

【作者名】

鼎都

【あらすじ】

殴り合いから始る、当小説。

BLとなっていますので注意してください。

時たま、本編と連携して過去篇も書くので、ご了承を。

まだまだ未熟者ですが、よろしく願います。

墮落と君臨 (前書き)

これはBLです。

Hシーンとか出てきます。(多分)

作者の気分次第ですが・・・。

あと、時々まぐろい場面も出てくるかも? といいかげんです。
Dの付く超素人小説です。

気分を害されても知りません。

墮落と君臨

バキッ…

ドカッ…

鈍い音と共に、黒く動く影がふらりふらりと地に墮ちる。

影は人。

地へと体を押し付け、体に力を入れて立とうとしてもガタガタと手が震え、まともに力が入らず、再び地面へと体を預ける。

ドッ…

地へ体を預けたその者の顔を容赦なく踏みつける足。

先程まで立っていた、その者と一対一で潰し合っていた相手の足だった。

「だっせ。NO，1と名乗ってもこの程度かよ」

自分が踏みつけている男の体はボロボロ。

しかし、当の本人はまったくの無傷。

それどころか、息一つ乱していなかった。

「くっ…あぐう…」

「んな、汚え呻き声あげんなよ。耳障り」

踏みつけていた足で、横向きに横たわる体を仰向けに蹴れば、次は喉を潰すように踏みつけた。

喉を潰されては、呻き声をあげるどころか、まともな呼吸すらできず、がひゅと、気のない息が抜ける音しか出なかった。

「あゝおりん！それ以上やると本当に死んじゃうよ？」

「あ？別に良くね？俺、ぶち殺すって言ったじゃん。つか、りんを付けんな」

「んじゃ、碧。それ冗談じゃなかったの？」

「俺冗談嫌いだし」

「まーそーだね。でも、犯罪者にはならないようにしようよ。折角堕ちてくれたんだから」

「チッ…まあいいけどな。おい、テメエ等、此処で宣言してやるよ。阿修羅総長、碧の名において、今からNO, 1の座は阿修羅のモノだ！」

地に伏した屍の数々。

立っている者と言えば、NO, 1の座を奪い取った族、阿修羅のメンバーのみだった。

この時より、今まで最強の名を馳せていた族、輝石はN O, 1の座から堕ち、N O, 2へと成り下がった。

そして、N O, 1へと上り詰めたのは阿修羅。

総長、碧が率いる最強メンバーで構成された阿修羅がN O, 1へと躍り出た。

堕ちた先の人生相談

強ければ強いほど、その世界では力となる。

その強さは暴力的なモノであり、一般社会では通用しない力だ。

暴力という力が通用する業界にちんまりと生息する俺。

不良という、近代の社会から消えかけそうな一握りの者らによる乱闘に偶々遭遇し、ちゃっかり入っちゃった、テヘツ☆のノリで興味を持った。

何より、毎日の鬱憤を発散出きるから。

殴れば殴るほど進む、荒れ。

荒れ狂う毎日。

黒かった髪を金に染め、今まででは有り得なかったゴツめのリングや、ブレスレット、ネックレスなどを身につけては街を徘徊した。

そして、見かけで喧嘩を売ってくる連中の喧嘩を買っては勝利を我が物にしていた。

全戦無敗の記録。

次第に、時が進につれ俺の後ろには今までに潰した連中が引っ付き
回るようになりそれが集団となって「族」というグループを生み出
した。

何かを望み、願っていたのか。

「輝石」と名づけた。

そして、総長の座についた俺は本名を名乗ったことが無く、特にど
うといった理由もなく本名から適当にとった「有〔ユウ〕」と名乗
り始めた。

数で劣るものはいない。

力で劣るモノはいない。

戦で劣るモノはいない。

無敗の名を馳せていた「有」。
最強の名をはせていた「輝石」。

No, 1の座は未来永劫、輝石と、それを率いる有のものとされて
いた。

しかし、

それは甚だしく簡単に崩された。

頂点に君臨し、輝石に、有に勝る者はいないだろうとされた直後に。
たかだか、一年で。

族の名は「阿修羅〔アシユラ〕」。

総長の名は「碧〔アオ〕」。

戦力で劣るはずのない輝石が、数えて二十数名の者たちによって簡単に潰された。

総長同士の闘いも、呆気なく幕が降りた。
決着は碧の完全な勝利。

自分の力の無さに呆れた。
今まで調子に乗っていた自分をバカだと思った。
散々人を貶していたのに、貶される側になり後悔をした。

そして、何よりも：

自分を潰した相手だというのに

敵の総長、「碧」を綺麗だと思ってしまった。

何を考えているのだと思った。

それは、「男」だからというのではない。

今まで恋をしたことが無いから、自分の制御しきれない気の抜けようにバカらしいと感じた。

そして、それが恋というものならば本気で向き合いたいと思った。

例え相手が、こちらに全く興味が無かろうと。

キャラ紹介。(前書き)

随時追加していきます。

キャラ紹介。

主人公

碧河 朔羅 みどりかわ さくら

学園⇒汐音 朔羅 せきね さくら

高校2年16歳 誕生日…10月14日
身長172cm 57kg

性格

無表情多し。

笑顔は珍百景ということ。

従兄弟

碧河 霧 みどりかわ きり

学園理事長。

20歳大学3年 誕生日…8月11日
身長185cm 体重73kg

性格

裏表有り。裏、かなりの俺様、鬼畜っ子。
表、優しいみんなの御兄さん。

生徒会長
くじょう ゆうき
九条有紀

高校3年18歳 誕生日…4月26日
身長183cm 体重70kg

生徒会執行部会長。

仕事は放置。エスケープ犯代表。

性格

俺様。自己中。

男は単純？NO。こいつは難しいことを考えすぎるバカ。
ヘビースモーカー。

生徒会執行部副会長

しろい こう
白維 昂

高校3年17歳 誕生日…9月25日
身長179cm 体重67kg

会長の仕事の3／4をやっている。

世話焼き。

お人好し。

生徒会執行部会計

りゅう みのる
龍咲 実

高校3年18歳 誕生日…4月4日
身長180cm 体重69kg

人を弄るのが好きなドSっ子。
謎めいている人物(?)。

生徒会執行部書記
かしょう かなめ
火宵 要

高校2年16歳 誕生日…7月18日
身長177cm 体重65kg

忠実な子。
仕事好きで常に何かをやりたがる。
情報処理は全て要役。

みどりかわ みなこ
碧河 美奈子

年齢秘密。 誕生日…12月14日
身長168cm 体重秘密

自己中心的の鬼。
何でもやりたがる。

世界史担当教諭

金沢かなざわ 龍冥りゅうめい

32歳 誕生日…7月29日

身長185cm 体重74kg

学園内では「鬼の金沢」と名を馳はせている。

優しいのだが、常識外れのお坊ちゃまたちに呆れているためいつも
ピリピリしている。

一応ノンケ。

クラスメート

みなたに

水谷 省吾しょうご

16歳 誕生日…9月7日

身長176cm 体重64kg

1年ノンケ代表

平凡普通の子だが、一応水谷グループの御曹司。

一人っ子のように、実は4人兄弟。

姉が一人（19歳）、省吾が長男で、双子の姉弟（中1）。

寮監

きせなが

紀瀬永 狼ろう

33歳 誕生日…5月1日

身長178cm 体重67kg

寮の管理人。愛想がよく、面倒見がいい。
ほんの昔まで「赤狼^{せきろう}」の名を巷で轟かせていた。
喧嘩は強いが、売られた場合、人助けなら買うが、自分だけならば
逃走。
無駄な暴力は振るわない。

ルームメイト兼クラスメイト
楠見^{くすみ} 禾李^{かい}

16歳 誕生日…8月14日
身長180cm 体重69kg

寮の同室者。節操無しというわけではない。
狗っ子キャラで、寂しがりや。
昔の朔と被るくらい、人間不信。
XSUMIグループ次期後継者。
喧嘩は見た目と打って変わりしない。が、売られれば買う。
とどのつまり、殆ど売られることがない。

想い

「碧・・・・」

そっと呟く。

「まだ気に掛けてるんだね。有たん」

「煩えよ」

2年前、約一年で日本の頂点へと君臨した族、「阿修羅」。

俺は、其いつ等に潰された。

今では、「No. 2」へとなり下がった。

だが、俺等との戦争後、直ぐ、奴等はパツタリと、姿を消した。

「No. 1」の座は変わらず、そのまま。

2年間の間にも「阿修羅」に奇襲を掛けようとしたが、姿を一向に見せなかった。

噂を聞いては駆けつけたが、総てがガセネタだった。

2年経った今でも碧の印象的姿は鮮明に覚えている。

碧の実力はすごかった。幹部の連中もすごいが、碧は格別だ。

相手が50・100だろうと圧倒的に勝利を手に使っていた。

しかし、容姿はとても華奢で、小柄。

髪色は、薄茶だが、月光をあびると琥珀、又は金色に光り輝く。

瞳はカラコンを入れているのか深緑でとても綺麗だった。

「有たんー仕事して」

「有たんは止めろってつってんだろ」

「じゃー仕事しなよ」

「俺に指図するな」

「荒れてるねー。例の彼、まだ見つからないの？」

“例の彼”とは碧のこと。俺等、輝石が全勢力をなしても、情報一つ出てこない。

当時の俺は中3。今は高2。

梅雨が明け、猛暑が続く夏。

物語の開幕といこうじゃないか。

面倒

まだ2年の俺は、入学式早々の選挙で推薦され、意志を聞かないまま「生徒会長」という地位に立ち上がった。

そうそう。俺の名前は、クジヨウ ユウキ九条有紀。

輝石の総長を務め、「有」と称している。

見た目も中身も不良な俺が、何故生徒会長などという役目を持っているのか。

それは、周りは容姿でしか決めないわけで、自慢ではないが俺は容姿で決められた。

おかげで、生徒会という面倒な役に付いちまった。

毎日毎日懲りもせず、男子校のくせに奇声があがるんだよな。

正直ウゼエ。

毎度毎度耳が痛えのなんの。

「会長、仕事してください」

「そうだよー有たんwボーと考え事してないでさー」

「煩え」

真面目な口調の奴は副会長の白シライ維コウ昂。

からかい口調な奴が、龍リュウザキ咲ミノル実で、生徒会会計。

「あと、任せた」

「有たん、仕事しないと怒られるよー」

「サボってる暇ありませんよ」

「火宵にでもやらせとけ」

「あーいいの？怒ると怖いよ？」

「アイツが怖くて総長なんかやってられるか」

火宵は、生徒会書記。フルネームは火宵^{カシヨウ}要^{カナメ}。

見た目は結構な不良だが、中身は意外に真面目な奴だ。
捨て台詞を言ったと同時に、俺は生徒会室を出た。

帰国

同刻、国際空港。

「朔羅く!!」

ふと名前を呼ばれ、声がしたほうを見ると大魔王様こと、お母様がこっちへ手を振っていた。

今現在のここは、空港のロビー。

俺は、約2年ぶりに海外滞在を終え日本に帰還したところ。

「やーん!久しぶりねー元気だった!?!」

「今朝も話したけど?」

「でも会うのは2年ぶりじゃない!」

「はいはい」

今朝はなしたときもそうだったけど、自棄にご機嫌な大魔王様・・・は、一番怖い・・・。

途轍もないことを企んでいそうで・・・。

「朔羅、講習会如何だった?」

「まあまあ。面白かったけど、つまらないものもあった」

「へー。やっぱりレベルが違うわね」

久しぶりに家に戻る間にも、向こうでの生活について母さんの質問攻めだった。

俺は適当に「うん」とか、「んー」と話を流した。

そんなことよりも、帰ったらアイツとの約束を守ることを考えてい

た。

“ 帰ってきたら、真先に連絡を入れろ”
元気にしているかな・・・昂。

疑惑

――――生徒会室。

あれから、火宵から“手に負えない”とのことで、俺は生徒会室へと戻った。

どうやら、必須書類が溜まりすぎているらしい。

「有たんー今までどれだけたまらせてたの？」

「一週間」

「だから、お前は他人からバカって言われるんだ」

「煩えよ、火宵」

「いいから、仕事してください」

P i r i r i r i P i r i r i r i

ふいに電子音になる。

昂がポケットから携帯を取り出していた。

「失礼」

昂が一礼し、電話に出た。

どうやら、昂の電話からだったらしく、正直苛つく。

書類整理に追い込まれるときとか。

「……総……長？」

苛ついて、昂の電話相手との会話など聞く耳も持たなかったが、不意に耳に入った、「総長」という一言。

「有たん」

実が話しかけてきたところ、やつも「総長」に反応したらしい。

喜悦

※Side 昂

また、碧の話。

会長は毎日考え込んでいる。
碧の居場所、いつもいつも。

P i r i r i r i P i r i r i r i

着信音。

いつもと同じ音だから、幹部か、家の者からと思った。
画面を見ても名前表示がなかったので、一応出てみた。

「はい、白維です」

<昂か？久しぶりだな>

「・・・総・・・長？」

<何だ、その苦虫食ったような声だして>

出た瞬間、誰かと思ったがこの声、この台詞。
間違いなく「碧」だ。

「すみません。正直驚いて・・・何時？」

<昼過ぎだ。嗚呼、久しぶりに集会するから、召集命令出しとけ>
「はい」

<つつうか、敬語うぜえ>

「今、学校です」

くなるほど。じゃ、後でメールすつから、それ幹部に送っとけ」
「はい、では後ほど」

電話を切ってからふとすると、周りは静かだった。

書類・・・紙が風でカサカサと揺れる音のみだった。

多分、会長と実が俺の発した言葉で色々考えているのだろう。

そして、この沈黙を破ったのは“お前はどこの族だ？”と聞いてきた、会長だった。

実も、顔には笑顔を浮かべてはいるが、その裏にはドス黒い殺気が感じられる。

命令

※Side 朔羅

「朔羅♪」

「ん？何？」

昂との電話を終えたとき、母さんが部屋に入ってきた。

・・・でもさ、いくら親子でも、年頃の男の子の部屋だよ？ノックぐらいしろよ・・・。

「あのね！朔羅には、明日からこの学校に通ってもらいます☆」
「は？」

学校？・・・ガッコウ・・・学校！？

いまさら？つか、突然すぎだ！
差し出されたパンフに戸惑う朔羅。

そんな様子から、朔羅の思ってることを読み取ったのか、

「行ってくれるわよね？」

と、少々低めの声で黒い影を見せ付けられた。
こうなったら答えは一つ。

「Yes・・・喜んで；」

「良かったわ」

朔羅の母は最強であった。

俺は渋々、母に渡されたパンフを見た。

【碧河学園男子高等学校】

・・・碧河？

「母さん・・・の学校？」

「正解！勘がいいわね！！でも、理事長は違うわよ？」

「え、じゃ、誰？」

「霧君よ」

「霧兄？今、大学生のはずじゃ？」

「碧河学園の大学部の方に通いながら理事長をやってもらってるの」

ドンマイ・・・霧兄。

母さんは自分で始めたことでも、面倒であれば人に任せてしまう・・・。

ああ、霧兄とは俺の従兄弟で大学2年で今年20だったかな・・・。
容姿端麗、頭脳明晰、運動能力もずば抜けて高く、皆が羨むくらい、
全て完璧な人。

自適

「荷物はまとめてあるし、明日ママが送っていくから準備は着替えだけね。」

制服はもうあるから、着て行ってね。あとは変装！朔ちゃん昔荒れてたでしょ？だから顔知ってる人いーっぱいいると思うの。だからこれとこれつけて行ってね！襲われ防止のためにも！」

「いや、確かに俺は一時期喧嘩しまくってたけど何でこれ？つか、2年前だから意味ないだろ」

「それがねー霧君が言うには結構族関係の子がいるらしいのよ。霧君の影響もあってね」

「あーそういうこと。まあ、いいけど。何でこんな・・・ボサボサでいかにも重そうなの？」

「いいじゃない！不良君の目を欺くためにも必要なのよ！」

何か、いつも押しの母さんが焦っているような気もしないことも無いが一応頷いておく。

正直、この時期にこれはないんじゃないかな・・・。

蒸れそうだな・・・。

2年前。俺は当時中3で族をまとめていた。

副総長の昂と、幹部3人とメンバーが十数人。

とてもじゃないが、周りの族と比べると圧倒的に少ない人数。

だが、一人一人のレベルが圧倒していた。

メンバーの中で弱い奴でも10人は相手に出来る。

俺が集めたんだけどな。

町を回ってるときに見つけた面白い奴を加えていたらこうなっていた。

元々チームを作る気は無かったが、集えば集うほど親好が深まり一つのグループになっていったのがきっかけ。

それからというものの暴れるために町に繰り出しては喧嘩、乱闘の日。

中学校など行っではおらず昼夜逆転生活の日々をすごしていた。

まあ、過去はそのくらい。

今、敵対していた「輝石」ともう一つ「残雪」がどうなったかは知らない。

それに実を言えば昂とは連絡をとっているも他メンバーとは連絡を取っていないし帰ったら阿修羅の解散宣言をしようかと思っている。そろそろやんちゃしてらんなくなるからな。

高2にもなれば少しは大人になるってもの。

向こうで講習会及び、講演会を見てきてそういう道に進むのも悪くないとは思ったが正直面倒だとも思った。

自分の好きな道がない今、高校に入ることとは道を見つけるにもいい

機会なのかもしれない。

自適（後書き）

お久しぶりです。&久々の更新です。

ノート消え去りましたという宣言。

ということで、頭の中空洞のまま流れで書いていきますので途中話が可笑しくなっても気にしないようにお願いします・・・。

話はつながっているはず。

そして、ノートに書いていた当時と現在とでまた文の書き方が違ってきていて、読みにくくなっているかもしれないかもしれません；

いやーホント、大変ですね。小説の更新は。

また色々整理つけてばーん！と更新していきたいと思いますのでお付き合いよろしくお願いします！

入学

白馬の王子様……の住む住居は「お城」。

一応財閥の跡取り息子のような存在の俺の住居は「屋敷」。

では、これから住むことになる学校は？

「お城」と「屋敷」と「高級ホテル」だ。

——学校らしい質素な場所はあるのだろうか？

何故、来て最初に思うことが「疑問」なのだろう。

普通ならば期待に胸が高鳴るだとか、膨らむだとかだろうに。

「母さんの趣向ってズレてるからな」

昔からそうだ。

ロマンチストで、付け加えにマニアック。

白馬の王子様が迎えにくるだとか自分の白いお城だとか広大な領地だとか。

西洋のお話がとても好きで「母親」であることを忘れ自分の好きな

ことには知ることが多々あった。

何時まで愚痴^{らち}ついても埒^{らち}が明かない。

季節外れの転入生ということで先ず、理事長室へと赴かなければならない。

朔羅は理事長室が在る「屋敷」を思わせる校舎へ向かった。

ふと、屋敷へ向けて林のような森のような、木々が茂る中をあるけば人の怒声が聞こえてくる。

何や何やと野次馬のように寄ってみればがたのいい男が二人。そして、そいつらよりは小柄な少年が一人。

羊に集る狼……。

まさにそんな感じだった。

「やめろって！」

「いい加減さ諦めてやらせてくれよ」

「そーそー尊ちゃんも気に入るって！絶対！」

会話からすると無理矢理ということだろうな。

正直、見逃すわけにも行かず足音をわざと立てて近寄る。

というか、話の内容がわけ分からない。

「やらせろ」

つまり、殴らせろ？

気に入るわけがない。

殴られて嬉しい奴なんて相当なMだ。

だが、その抵抗している少年にM気質な感じは全く感じられない。

「あ、た、助ける！」

話の内容を解読しようと思考をめぐらせて見ればこちらに気づいた少年が命令形で助けを頼んできた。

プライドだけはあるようだが・・・。

「命令形なんですか」

「ああ？？テメエ誰だよ」

「むっさいオタクに用はない」

オタク？

ああ、そうか。

今の格好は、周りからはオタクのように見えるのか。

別に黒縁眼鏡に手入れをしていないボサボサの野暮ったい髪をしている人〓オタクと言いたいわけではないが、金持ち学園のこの閉鎖的空間の中ではそうなるようだ。

今時のオタクは、母さんが好みそうな金髪碧眼または蒼眼の白馬に乗っていきそうな王子様でもオタクの部類なのだ。

向こうに行っていたときの友達がオタクだったから。

日本のアニメは面白すぎるだとか、可愛いだとか、俺には表しようのないオタクの表現方法で語ってくる。

「僕はオタクでは有りません。」

怒声が聞こえたので何事かと思っけてきてみたのですが無理矢理ですかね？」

「ああ？知らねえよ。俺らはお楽しみ中なんだ。すぐに消えろ！」

「ちょ、助けろ！！」

再び少年に向き合った男は少年に服に手をかけ、Yシャツに手を掛けると一気に引き裂く。

ボタンが飛び、中にきていたシャツが見える。

「助けを求めるに、無理矢理とみなし手を出します」

一言言い切ると、こちらを向いていた男を喉元から蹴り上げる。

野太く、野生染みた声を発した男に気づき少年を襲っていた男も振り向く。

朔はその男に顔面ハイキックをお見舞いすると、前歯がとれ鼻血が

噴出し白目をむく男。
まるでアニメや漫画のワンシーンのようだ。

「大丈夫ですか？」

襲われていた少年に手を差し出せばペシと払われ、自力で立とうと
していた。

よろよろとした足取りで立つ。

恐らく、立っているのがやっとだろう。

今にも倒れこみそうだ。

腰が抜けているようでプライドの高さで立っているようなもの。
そこには関心が持てる。

「助けたのに、礼もないのですか？」

少年はそれでも無言だ。

一言も発しない。

常識を学んで欲しいものだ。

俺は少年に寄り、少年の両頬を摘み引っ張った。

「い、いひゃ、い！」

「その口はただついているだけの飾り物ですか？屈辱的瞬間を見られたからといって失態を誤魔化そうと強気になるのもいいですが、

プライドが高いのならそれ相応の常識を持ってください。
人から何らかのことをされ助かったのなら、御礼をする。
常識なのでは？」

淡々と紡がれた言葉に、向き合っているも目をそらしている少年は
更に口を固く結んだ。
ぐうの音も出ないらしい。

「まあ、いいですけどね。ですが、社交の間では大切なことです。
しっかりとした常識を持たなければすぐに蹴落とされますよ。
プライドが高いこと云々の問題ではなく、周りと共有し共同に繋が
っていく中では当たり前のことです。

お礼を言うのも当たり前のこと。
それを知っていてください」

朔羅はそれだけ言うと言ぐにその場を立ち去った。
その後も朔羅の視界に入っている間少年はその場に立ち竦んだまま
で微動だにしなかった。

過保護

——コンコン

無駄な造りである校舎を歩き、無駄に凝って装飾されている廊下を歩きある一室へと来た。

「理事長室」である。

ノックをすると中から「どうぞ」とよく通った声が聞こえ、ドアを開けた。

「霧兄、久しぶり」

理事長席に座っていたのは、数年経つ間に依然会ったときよりも随分大人びているものの、紛れもない従兄弟の霧だった。

「朔羅。お帰り。そして、ようこそ」

「うん」

「じゃ、其処座って。学園の説明するから。レモネード淹れてくるな」

随分、いたせりつくせり状態だ。
なんというか、結構な身分についていて胸張っててもいい地位なの
に世話好き。

完璧な彼を更に完璧にするのは其処だろう。
身分が高くても、誰にでも平等。

霧は朔羅の憧れでもあった。

「ほら、朔羅の好きなレモネード。霧兄特製のね」

「ありがとう」

昔から霧が作るレモネードは好きだった。

少しの間を置き、霧は説明を始めた。

「じゃあ、先ずこの学校内での身分の差。

社交界に出る彼らにとって自分の地位と周りの地位に差が必要にな
ってくるんだ。本当は平等がいいんだけどね。

上級生だけと家柄によっては下級生に敬語を使わなければいけない
こともあるんだ。

俺が言うのも何だけど無茶苦茶だよ」

「霧兄の所為じゃないだろ。母さんがふざけて金持ちの学校を作ったんだから母さんの所為だ」

そうなんだけどねと苦笑する霧。

これでも昔は荒れたことで有名だ。

俺が以前、阿修羅の指揮をとっていたように霧兄もまた総長として指揮をとっていたことがある。

「蒼天碧空」

それが霧兄のチーム名。

意味は広大さ、雄大さ、偉大さ。

青い空を主題にそんな意味を含めている。

そして、皆を包み込む強さ。

憧れを抱くのは決定事項と言っているほどだろうな。

「それじゃ、えっと身分はクラスのアルファベット順。Sを筆頭にAからDまで。因みに階級と同時に頭脳のレベルも計っているから身分が低くてもSにはなれないけどAクラスやBクラスに在籍している子もいるんだ。

それから、大まかに分けると、俺が一番上。

碧河家は特別扱いされているからね。一番待遇されているのは朔羅の両親、叔父さんと叔母さん。

次に朔羅。その次に俺の両親で、俺ね。

朔羅が入学するに当たって朔羅が一番上だけど、身分を隠して生活

することになるから表向きは俺が一番ってこと。

で、階級順に言うと、理事長、生徒会と風紀委員、教員で生徒。因みに、生徒が上ということもありえる。

教員はこの学園じゃ自分の家柄がない限り最弱になってしまっただ

「あー・・・うん。よくわからないけど・・・ランクがついてるんだ」

「そういうこと。それで、朔羅には叔母さんからのお願いで2年B組に入ってもらうね。特待生の扱いで。家は一般家庭。

個人データは全て学園内のみ書き換えてあるから。詐称戸籍もこっちで作ってあるから心配ないよ」

「何それ、自棄に慎重じゃん」

「厄介なのがいるからね。この学校には」

ふーんと氷がとけ少々味が薄くなっているレモネードを口に含み納得する朔羅。

すると、慌てたように口を開く霧。

「あ、朔羅！これだけは言っておくけど、絶対に変装とらないでね！あくまで優等生！

髪と目について、周りに晒すことは絶対ないように！タブーだからね！

はつきり言うと、この学校は男子校。そして、閉鎖的空間。

監獄の中、鳥籠の中のようなところ。女の子の存在がないから必然的に同性に恋愛感情が向かってしまう。

だから、ここはホモの巣窟。

同性愛者が殆どだ」

「同性愛者？あー気にしないよ。向こうにめっちゃいたし。つか、俺も軽くそっちよりだし。女のほうがいいとはおもうけどどっちでもいいしな」

快樂主義者。

霧はそれを理解すると惜しそうに頭をかかえる。

霧は朔羅のことを従兄弟と見ていたと同時に恋愛感情を抱き片思い相手とも見ていたのだ。

だから、朔羅の口から「軽くそっちより」という言葉が出てきたことでショックを受けたのだ。

理性

時計を確認すれば午後5時を回ったところだ。

「今日は此処に泊まっていけ」

「あーうん。あれ、寮あるんじゃないの？」

「入寮は明日から。明日の朝、担任に迎えに来させるから。

あと、荷物は全て部屋に運び込むであるから。片付けもね。もちろん全てが内密だから専用のメイドにやらせたから」

「ああ・・・そう。ホント、いたせりつくせり状態なんだけど」

苦笑してみせる。

晩飯は碧河付専属コックが腕を振るってくれたらしく、和食をご馳走してくれた。

「懐かしいなー向こうでは肉ばかりだったから魚がすごい新鮮」

「上手いだろ。産地直入！朔羅のためにだよ」

「恥ずかしいこというなよ」

赤裸々に話す霧の言葉。

誰々のためとか、女に言えっの。

「そういえば、霧兄は彼女いないの？」

「いないよ。好きな子はいるけどね」

「え、嘘！誰！？」

霧は顔が良かったため、告白をしても一発で返事が返ってくるだろう。

「OK」の。

だが、好きな子がいるのに告白もしていないということは中々慎重な相手ということ。

一体何処の誰やら……。

「誰って言われてもな。言えない」

「うわ。……霧兄に好きな人。想像できない」

実を言えば、霧は今まで一度も彼女を作ったことがない。

好きな人がいるとも聞いたことがなければ女を意識したこともない。

まさかのまさか。

「その好きな人、女じゃない？もしかして」

水を口に含んだ瞬間に朔羅が呟いたため、霧は水を噴出した。
どうやら凶星のようだ。

「霧兄が男に走るとはねー霧兄が受けになることはないと思うから
相手が受けだよな」

「朔羅。その話はまた食事が終わってから」

顔を真っ赤にして苦笑する霧。

複雑な気分に陥っているのは無理もない。

「で？誰？」

「誰って・・・」

霧はこの上ない幸せ状態に陥っている。

本人は気づいていないが、片思い中の相手、朔羅がソファに座っていた霧の上に乗っているのだ。

男は狼。

この状況ならば完璧な霧だろうが関係ないことだろう。

「朔羅・・・あのさ・・・」

「ん？」

いい加減気づいて欲しいと思う霧。

理性も限界という。

そんな時、朔羅が爆弾発言をする。
それも起爆スイッチを押すように。

「もしかして、俺だったり？なわけないか」

「朔羅・・・」

「何？」

「お前が悪いんだぞ」

霧の中で今まで押さえ込まれていた野生心が放たれたのだろうか。
理性がぶっ飛んだ霧は乗っかっている朔羅を上手いこと押し倒す。

「え、霧兄！？嘘嘘！冗談でしょ？」

「冗談で俺が押し倒すか？朔」

《朔》。

これはまだ、霧が蒼天碧空を仕切っていたとき、呼んでいた朔羅の
呼称。

蒼天碧空時の霧は俺様だったという・・・。

理性（後書き）

はい。

霧君がわんこから狼へと進化を果たしました。

従兄弟同士はまだ近親相姦にはなりませんよねー

弟攻め兄貴受けて可愛いものですよね・・・やってみようか。

軽く総受けになりつつある状態・・・。

因みに、作者イメージでは朔ちゃんは綺麗系クール系です。

つまり、美人でかっこいい子。

作者は自分より小さい身長と、見た目が女の子！な可愛い子は苦手としています・・・。

シヨタは別ですけどww

では、次は18禁です★

あまりエロくないかもしれませんが・・・エロくないですと先に宣言。

エロシーン苦手なんだよ！こん畜生！

では、久しぶりの更新でした。

ヘタレ

「ごめんなさい!!」

「もういいよ。霧兄。済んだことだし」

「本当にごめん!」

ただひたすら謝り続ける霧。

あれから、我に帰り謝り続けている。

裏でなければただのヘタレである。

因みに、現在時刻は午前7時。

もうすぐ担任がやってくる。

シャワーと朝食を済ませ、身支度を終わらせた朔羅は何時でもいけるよう準備を済ます。

霧はカーペットの床で土下座しているが、朔羅はソファで紅茶を啜っていた。

「早く、身体起こさないとばれちゃうよ?それに、理事長は胸張ってないと示しが付かないんじゃない?」

「そうだけど・・・」

「俺、そういう霧兄、嫌いだな」

一言告げればすぐさま、霧は立ち上がり理事長席に着いた。

本気で嫌われたくないようだ。そして、好きらしい。

「あ、そうだ。カードキーを渡しておくよ。そのカードキー、クレジットカードと同様の働きをするしそれが無いと学園内で動き回ることが出来ないから。」

あと、個人情報も入っているから失くさないようにね!」

「分かったよ。じゃあ、俺表で待ってるから。また来るよ」

「うん。朔羅、ホントごめんね!」

「しつこいって」

呆れを含んだ溜息を吐くとやたらとごついドアを開け表に出た。

「お前が、せきね 汐音 さくら 朔羅か? 担任の いしばし 石橋 しょうせい 翔青だ」

「宜しく願います」

数分後、担任の男性がこちらに駆けつけてきて挨拶を交え、握手をした。

見た目は普通。

ただ、少し服装を正せば女性が好みそうなワイルド系の男になるだろう。

恐らく、この学園の風習からわざとだらしない格好をしているのだろう。

「お前、見た目だと“サクラ”って名前が似つかわしくないな」

「文句は親に言ってください。僕に言われても困ります」

「生意気な奴だな」

「如何とでも」

無表情で淡々と答える朔羅に面白味を感じた石橋。

からかうことが好きな石橋は新しい玩具を与えられた子供のように心を弾ませていた。

忠告

教室前に来たところだった。

石橋がピタリと足を止めるとこちらを振り向いた。

「さて、生意気なお前に一つ言っておこう。お前が入る事となるBクラスははつきり言って微妙な位置だ。だから、競争率が高い。

Sクラスなら本人達はSクラスとして満足している。Aクラスもそれなりの位置についているからある程度は大人しい。だが、Bクラスは中途半端なんだ。

気を抜けば追い越されるかもしれないとピリピリしている。だから敵対心が強い。

だから、周りを騒がせるような言動を慎むことだ」

真剣な眼差しだがボサボサで無造作に放置された髪とだらしない服装で全く真剣さが伝わらない。

「そうですか。ご忠告わざわざ有難うございます。でしたらテストで容易に高得点を取らないほうがいいですかね」

「特待生ならそこその点を取らないといけないんだが、この場合しょうがねえよな。テストでは、主要科目700点満点中、500から600を取れば特待生として見逃されるだろう。

Bクラスの平均は450。だから丁度いいくらいだ。特待生は満点とらなければSやAになることはないからな。それだけだ。いいか？」

「はい。有難うございます」

「名前を呼ぶ。そしたら入って来い。簡単な自己紹介を用意しとけ」
「はい」

遠慮もなく廊下に居ても十分騒がしい声がする教室のドアを開けた。席に着けーとやる気のない無気力な声が聞こえてきた。しかし、それだけやる気のない声を出していたとしても、朔羅は信賴できる一人だと感じ取った。普通、如何でもいいならば態々忠告するようなまねをしないだろう。自分が面倒ということもあるだろうが、それでも見かけとは違い、生徒をよく見ていることが感じ取ることが出来た。

「汐音」

名前を呼ばれスッと教室内に入る。

案の定、この格好と見かけでは批判され、偏見の目と期待を裏切られた声。

そして、罵声までが飛んできた。

「汐音朔羅です。宜しくお願いします」

「マジで簡単だな。汐音は特待生でこの学校の特色に慣れていない。不安なこともあるだろうから助けてやれ。くれぐれも問題を起こすようなまねはするな。俺のクラスに問題児は要らん。以上。号令」

「起立。礼」

学級委員長らしき人物の号令で起立と礼をするもだらしない姿勢で、いかにもといった態度だ。

「汐音、席は窓際一番後ろだ。高位置だからって寝るなよ。チヨーク飛んでくるから」

「はい」

ふらふらとした足取りで教室を出て行く石橋を見送ると、指定された自分の席へと足を進めた。

正直、周りの視線が痛い。偏見の目はもちろんおぞましいと思われるような視線も突き刺さってくる。

こそこそと隠れて話している者や、ジッとこちらを睨んでくるような輩まで居る。

本当に微妙な立ち位置のクラスのようにだ。

俺が歩く度に、其処に居たものは一步後退った。

席に着くと、学校指定の鞆を本来であるならば周りと同様に机の横に掛けるのだろうが、無造作に机の上に置くと制服のポケットから携帯を取り出し、弄り始める。

目的はメールとゲームだ。

信頼

テトリス。

独特の音楽で、ブロックを上手いこと積み、消していくもの。

難しいが、面白い。

連鎖は最高13回。

偶然だがな。

メールを確認しながらゲームをしていくうちにのめり込んでしまっていたようで、人の気配に気づいたとき遅かった。

ゴスツ。

「いっつ・・・」

鈍い音と激痛が走ったのは俺の頭上でのこと。

頭を片手で押さえ擦り、衝撃を与えた人物を見上げた。

「お前は俺の授業を真剣に聞く気がないのか？特待生」

周りはクスクスと笑っている。

他の先公では恐らく大笑いするのだろうが、この教師は皆が恐れる教師なのだろう。

誰一人として、こちらまで声が届くような笑い方をしていない。

「失礼しました。どうぞ、続けてください？」

携帯をボタンと閉じ、ポケットに突っ込むと机の上に置いていた鞆からノートと筆記用具を取り出し、鞆を横に掛けた。

苛立ちを抑えたいが、態度に出てしまう。

足を無造作に机の外に出し、座り方も俺様のように社長座りとしてしまう。

浅く、だらしなく座る様子は教師をさらに苛^{いらだ}出せるだろうと思ったが気にしない。

しかし、これも策略の内だとしたら教師はどういった反応を示すだろうか。

「お前、教師舐めんじゃねえぞ？」

「では、貴方は上下関係を作るために権力を振るいますか？それともそれは生徒の更生のために言っていることですか？」

「後者だ。俺には権力はねえ。なら実力主義だ。素直に先公の話を聞け」

その言葉を聞き、朔羅はだらしなかった姿勢を正す。

「そうですか。ならゲームは貴方の勝ちです。これからよろしくお願いします」

「試したのか？」

「ええ。信頼できる教師は必ずどのような生徒であろうと気にかけて注意すべき点は注意するものです。

僭越ながら試させていただきました」

「で、俺が勝った場合はどうする気だったんだ？」

そういえば・・・とゲームの懸賞を用意していなかったことを思い出した。

こちらで勝手に始めたゲームだ。公開する場など無いとも思っていたこともあり、何も考えていなかった。

「そちらで決めてください。因みに一個ですから」

「そうか。なら考えておく。授業後聞きに來い」

「はい」

とりあえず、今回のことで周りの視線を集めてしまったが一人、信頼できる先生が出来たことは確かです。それだけでも確かな収穫だと思う。

敵を増やすならば有効で信頼性の高い者も必要だろう。

利用しているようだが、俺は駒と思うことはあるが、決して無駄にはしない。

ポーカーのブタであろうと、手持ちの手札であることには変わりないから。

味方

「聞きに来ました」

授業終了後、先生が教室外へ出たところで聞きに言った。

その顔は何故かすっきりとした顔で鬼の形相をしなければ生徒達に親しまれる先生なのだろうと思った。

というよりか、生徒がきちんとすればいいだろうと思った。

「お前隠していることないか？」

「隠していること、ですか？有りますよ？」

隠し事など、余程の純粹で素直な奴でなければ秘密の一つや二つ持っていたって可笑しいことではない。

それが普通というのは可笑しいことかもしれないが、人間が生きていく以上必要不可欠に取り入れられた知恵が働く以上秘密、隠し事は出来てしまうものだろう。

アダムとイヴが禁断の実、知恵の実を食べてしまったというのは可笑しい話だと思う。

興味に惹かれるということとはそれを食べたいと思う。

食べたいと思うという意志もまた知恵の一つではないか、と。

食べることで自分が満足できるのでは・・・これを食べるとどうなるのか、と。

「お前は頭がいい。そうだろう？だから答える。“有る”と」

「先読みもいいところですよ。秘密を持っていると素直に言って何か悪いことでも？その秘密が何であろうと僕にとっての秘密。周り

にとってのいい噂話のネタですよ」

「そうだろうな。だが、お前が言い出したことだ。素直にお前の一番重要な秘密を教えろ」

痛いところを突いて来るのもまた面白きこと。

この状況を楽しんでしまっている俺。

きつと、顔は無表情であるだろうけど。

「そうですね。では、まず先生のお名前を教えてください」

「金沢かなざわ 龍冥りゅうめいだ」

「金沢先生。僕の秘密ですが誰にも言いませんよね？」

「当たり前だ。これでも鬼の金沢の名を校内に轟かせている。それなりの言動はとっている」

「ですね。心配も何もありませんよね。僕の名は碧河朔羅です」

一瞬にして、顔つきが変わる。

鬼の形相とは程遠い驚愕の顔。

無理もない。先ほどまで大人をゲームの駒として扱い、勝手に勝敗を決めて遊んでいた。

そしてその者が、学園内で崇拜され、優遇されている“碧河家”の者だと知ったのだから。

「碧河家の者だったのか？分家か？」

「いえ、本家です。碧河家第一子次期後継者候補第一継承権者碧河

朔羅です」

「冗談きつい。洒落にならん」

「でしようね」

見かけ、口調、性格。人間だけではない。

全てのもの同様にかかわってくること。

人は表向きだけを見すぎ、裏を見ることが出来なくなってしまっている。

裏を絶対に見ろ。見極めろとは言わない。

間違っパンドラの箱を開けてしまったということになってしまっ
ては危険だ。

知らなければならぬモノ。

知っていいモノ。

知らなくていいモノ。

知ってはならぬモノ。

「知る」ことに関し、安全な面なものもあれば危険が過ぎるものも
在る。

大袈裟かもしれないが、俺たちが存在する社交界の中では重要性且
つ、機密性が問われるものが多く存在する。

それほど大袈裟でなければならぬことも世に出回らないほど沢山
に。

他愛

金沢と話が終わると教室へ戻った。

一気に注目を浴びることとなったが、無視をした。

現在、3時間目が終わったところで次は4時間目。

現国。

3時間目は先生が勝ちだった。

1, 2時間目も同様に行っていたが、現社の先生も英語の先生も俺を無視していた。

如何でもいいとでも言うかのように。

「生徒を見ない先公など要らない」

恐らく、俺が霧兄に連絡をすれば明日には既にこの学園を去っていることだろう。

この学園が腐っているところは教師始め、生徒が権力を持ちすぎていること。

家柄が何だ？

己で作り上げたもので無いくせに自己のように語り、媚る。腐りきっている。

碧河の力とはいえ、俺は自分で株をやっている。

不景気ながらもそこらの会社には負けないほどに。

「お前、すげえな」

「はい？」

携帯で、色々とチェックしていたとき、突如明るめの声で話しかけられる。

顔を上げると、目の前には短髪茶髪の黒い瞳を持つスポーツ少年らしき人物が居た。

「何が・・・です？」

「だって、あの金沢に齒向かったんだぜ？普通だったら反省室に即Let's Goか、反省文100枚くらい書かせられるのに、ゲームを仕掛けるわ、懸賞がどうのこうので普通に喋るわすごすぎる」

「あの先生、鬼らしいですね。ですが、生徒をしっかりと見ている良き先生です。僕は敬服しますよ？金沢先生を」

目の前の少年は納得したようで、頷いていた。

「ところで貴方は？」

「あ、俺？俺は水谷^{みなたに} 省吾^{しょうご}。宜しくな。汐音」

「宜しく願います」

差し出された手を握り、握手をする。

とてもがっしりした男らしい手で羨ましいと思う。

ひょろっこい自分の手が恨めしい。

「お前、手綺麗だよな？肌とか。髪どうにかすれば可愛いんじゃないかね？」

「そんなことはありませんよ。それに可愛いとはいわれたくありません」

ん。一応、ゲイでもホモでもないんですから」

バイであるため、タチもやるときはやる。

それに、あまり可愛いといわれても嬉しくない。

「ふーん。ま、いいや。これから宜しくな」

水谷が前を向いたと同時に次の教科担任が来たため、皆席に座った。
俺は、ゲームにも飽きボーっと外を見ていた。

やはり、ノートも教科書も出さず、机の上に携帯のみ置いてあるという授業には最悪の状態なのに先生は何も言ってこない。

だが、授業が終わったときだった。

「汐音君。ちょっと来てくれるかな？」

俺は突如呼び出された。

まあ、恐らくは授業のことだろうけど。

それならばそれで、授業中にすべきかなと思い、この勝敗は引き分けと考えた。

昼食

4時間目終了のチャイムが鳴ったところで、人が移動をし始める。皆食堂に行くのだろう。

または購買。

此処は金持ち校であるため食堂はレストランのようで、購買はそこらの店とも比べ物にならないほどの物が並んでいるのだろう。

「汐音と一緒に行かぬ？俺、食堂なんだけど汐音どっち？」

席を立ったところで水谷に話しかけられる。

少し悩んだところで付いていくことに決め、行きますとだけ答えた。

「うわゝ結構人居るなゝ」

人が居る割には結構席が空いている。
というか、空間がある。

本当にレストランのようで、テーブルから椅子、周りの装飾までも
が豪華絢爛だ。

空いている席につくと、水が運ばれてくると同時に注文を聞かれた。
メニューも豊富にそろっていて、どれもこれも高級食材が使われて
いる料理だ。

高級ホテルの3星レストランなみだ。

「汐音どれにする？」

「僕は、パスタにします。クリームパスタで」

「じゃ俺、ピラフのセットでいいかなゝえびピラフのセット！」

単品料理から、セットメニューまで主種様々。

此処で、培われるのはメニューの品定めとマナー、ルールだろうか？
特に意味も無い気がするが。

「汐音って、名前聞いたこと無いけど何やってるんだ？」

「特に何も。特待生なので、家は一般ですよ」

「あ、そうなのか。俺んどこも特にはやってないんだよねゝ料亭や
つてるだけ」

「水谷グループは知っていますよ。料理関係に幅広く手を出してい
ますよね。料亭は首都圏内から地方までに数十箇所。最近のホテル

に店を出し始めてますよね」

最近聞いた情報をさらっと出してみた。

此処で過ごしていくには相手の力量、家柄を見なければいけない。

それと同時に、碧河にどう関係を持ってるかのも重要。

媚びうることなど無いが、生きていく上での術とも言っている。う。

「随分詳しいんだな。雑学は豊富？」

「雑学というよりは、此処で生きていくうえでの知識です。碧河家ははじめ、色々と知っていますよ」

「九条家は知ってるのか？」

「はい。各県に十箇所はおいてある柔剣道場を開いており、また日本本の裏千家の一つにも入っていますよね？茶道華道、和流全般に手を出しているという。あの碧河と対等でもある」

「うちの会長だからな。九条家。敵になるなよ？潰されるからな」

元々敵というか、裏では結構手をつないでいたりするから敵にする意味は無い。

敵に回したら潰すまでに厄介であることは確かだが。

「知っているのに敵に回すなどあるわけじゃないですか。僕だって来て直ぐに潰されたくありませんし」

「だよな。うちも碧河か、九条かどっちかと手組みたいわ」

「もう、跡継ぐ事は決まっていますのですか？」

「俺長男だもん。それに一人息子だし？ 姉ちゃんがいるけど姉ちゃんも海外で勉強してるよ。国際的な弁護士になるらしくて」

「すごいですね」

跡を継ぐことを自覚し、考えても居る。

もしかすると、個人投資もしているかもしれない。

そのうち、碧河と組む機会もくるかもしれない。

疑問（前書き）

お久しゅうございます・・・。

えっと、暫く放置申し訳ないです；；

年が明けてしまい・・・クリスマスネタも、新年ネタもありませんという状況。

少々、落ち着いてから、ゆっくりと書いていきたいと思っております。

では、あけましておめでとうございます。

これからも宜しく願います。

疑問

レストランのように広い食堂。

俺らはその片隅の席に座り、今に至る。

注文したメニューが運ばれ、目の前に並べられる。

一流のホテルから引っ張ってこられたウェ이터がそこかしこに歩いている。

生徒一人一人に目を配り、粗相の無いよう対応に当たっている。

しかし、何故か急にレストラン中央一直線に敷かれている赤絨毯の脇に並び始める。

総勢100名ほどの人間が。

両脇、50・50といったところだろうか。

そして、ほぼ同時に生徒らからの歓声があがる。

いや、これは歓声というより、奇声や嬌声というべきか。

男にしては高い声を、大声を張り上げるなら応援で。だから、ここではするなといたい、野太く大きな声。

何が起こっているのか、俺にはさっぱりだった。

きゃーきゃーと猿どもが喚き、叫び、艶かしい声を高らかにあげ、がたいのいい熱く、むさ苦しい連中は野太い声で、気持ち悪くわーわー叫んでいる。

ただ、中央を歩いている人物に浴びせられている声であることはよく分かった。

俺の推測からすると、恐らく……。

「煩いだろ。生徒会の人間だ。生徒会室にちゃんとルームサービス形式で食事はとれるのに態々食堂まで来るんだ。その目的は多分、生徒へのサービスとかだと思うけど。」

あの2階の特別席。生徒会専用になっていて、生徒会に指名されない限りいくことは出来ないんだ」

やはり、生徒会による騒ぎ。

特別に空けられているガラスの扉から、真っ直ぐに伸びている赤絨毯を辿ると、階段がありそれをのぼると2階の生徒会専用席というわけか。

無駄な使いだが、そうでもしないと生徒会と生徒の騒ぎが酷くなるといったところか。

恐らく、この企てを考えたのは霧兄。

さすがといえるが、この騒ぎはどうにかならないものか。

「汐音？」

「あ、えっと如何しました？」

「いや、それこっちの台詞。生徒会気になるか？」

「はい・・・少々ですが」

「此処からじゃ、見えないよな。俺さ、結構情報通でさ学年の中じや学校のことは色々詳しいんだ。特別だぞ？」

水谷は、制服の内ポケットから小さめの手帳を取り出した。
なにやら、色々とはさまっており、ページの端が少々ボロボロになっている。

「あのな、これが生徒会の写真。本当はブロマイドは禁止だけどちよっと情報収集とかのために収集相手の顔写真をとるようにしているんだ」

手帳の中のポケットの中から5枚の写真を取り出すと、周りを慎重に警戒しながらこちらに差し出す。

受け取るとその写真を見て、落胆した。

恐ろしく、嫌な人物が移っていたからである。

そして、それがもとでこの学校を再構築したいという気持ちが湧き上がってきた。

というより、生徒会を解散させたいと思う。

「すみません。どうも見たことがある人物が移っている気がするのですが、彼は巷で不良を仕切っている族総長ではありませんか？」

「あ、そうだよ。会長は輝石総長。そして、副会長を除く他3名も輝石幹部だ」

「副会長は・・・」

「無所属だって聞いてるけど似た人が族関係にいるっていう話が今のところ出ている。確かではないけど」

副会長。

白維昴。

水谷が言うように、族関係であるのは確かである。

阿修羅副総長、昴。

情報が無いのは阿修羅自体が秘密裏に動き、派手な言動をとっているが互いに秘密を守り活動しているからであろう。

また、顔を隠し少々変装をしているからでもある。

昂の場合は普段のが本当の姿で、阿修羅活動時のみ髪を染めごつめのアクセをするため印象がガラリとかわる。

俺の場合はその現在の逆だが。

しかし、不良が生徒会長はないだろう。昂はまだしも、族幹部で血の気の多い者らが纏め役など到底できるはずがなかろう・・・。

この学園の未来が不安であるのは知っているもの、理解しているものの共通の考えだ。

他にもそう思っている人間がいても可笑しくない気がするが、この学校自体が異常といえるため全てが無効なのかもしれない。

呆れ果て、まともな会話も出来ないほどに気落ちした朔羅。

たとえば、隅であろうとも他の奴らとは違う行動をとっている自分らが、見ている側では目立っているとは知らず・・・また、それを見ていた「彼」のことも知らず・・・。

無駄

「これは・・・・・・・・また・・・・・・・・」

見た瞬間に言葉を失った。

いや、あんぐりと口をあけてただただ呆然としかできないといったほうがいいか。

昼飯の後、5、6時間目が終了し、放課後に入ると部活動に参加しているものは部活へ部活に参加していないものは寮へと行くため移動する者らでざわついていた。

HRが終わると担任に呼ばれ、何かと思えば入寮にかかわる諸注意と、寮の部屋の番号を教えられまた、寮の簡略地図などを渡された。この学校の寮はホテルと同じようにカードキーが鍵となっており、失くせば再発行までに相当な時間と金を要するらしい。

完璧なまでのプログラミングと、そのための人材機材の使用量。

また、カード内のデータの読み込みとその規則性からして全てのキーが開けられる可能性もあるため全てのカードキーを回収し、全てを新しいキーへと変えなければならないということもある。

担任が言うにはどうでもいいことらしいが。

それよか、寮だ。

校舎を見て、「城」「屋敷」「高級ホテル」と言った。

いくら金持ちの学校だからといっても全校の生徒数含め教員達も入っていたとしてもこれほどまでに大きな校舎は要らないし、広い敷地も要らないと思う。

こんな山奥で、これほどまでに広い敷地を持っていたとしても警備が大変なだけで余程の利益など有り得やしないと思う。

そして、寮。

校舎が校舎なだけあって、また寮も寮なだけあるようだ。

山の平地に建てられているとはいえ、山の中での建物の高さではないと思う。

そして、横幅にしても広すぎると思う。

金の無駄な使い方。金持ちはどうしてこれほどまでに金を無駄にしていたがるのだろう。

人間の心理の謎な点だ。理解できない。

「有効に、効率よく使うことが頭から抜けているのか？」

根本的なことが抜けていて如何する。

金はいくらでもあるから使い捲くって奴か？

山だって、土地であるため国へ払わなければならない。それも広大な土地代を。

生活費の一部に土地代、高熱費用、食事代、授業料、各資料など必

要最低限のものを含めても年間そこらの学校で払う費用より、数倍、もしかしたら数十倍もいくだろうに。

もう、いくらか考えたってこれが今日の前にしている現実であり考えても無意味と重い、一つ深い溜息をすると寮内へと足を運んだ。

考えない。考えたくない。考えても無意味。

・・・・・・無駄。

恐ろしく、中も豪華に装飾されている。

自動ドアも最新式ので、寮中央ロビーからして無駄な装飾が多い。

俺は「寮監室」と彫られた板がドアにはめ込まれてある部屋に向き、ノックをした。

寮監

「？」

ノックをした。

室内に人の気配はある。

だが、出てこない。

寮監は何をしているんだ？

ノックをしてから数分、ドアの前で立ち竦むようにして待つが幾度たてど目的の人物が出てくる気配が全くない。

ノックではダメだったのか？ と思いもしたがインターフォンらしきものもない。

ならば、ドアを開けて入ったほうがいいのか？ と思ったが、それはそれで自分の何かに引っ掛かり躊躇してしまう。

いや、この際開けたほうがいいのかもかもしれない。

そんなこんなで、考え事をしているうちにも時間は経って行く。

決意し、ドアノブに手を掛けると簡単に開いた。鍵をかけず居留守を使うなど馬鹿げている気もするが……。

「お邪魔します？」

疑問口調気味で室内に入ると、直ぐに、壁に突き当たった。
玄関となっているスペースの左に向き直ると、少々開けたように部屋があった。

寮監室兼寮監の部屋・・・といったところか。

靴を脱ぎ入る。

一步一步、部屋へと足を進める。

室内はとても明るく、しかもそれが人工的なものではなく天然である。

窓から差し込む日光で、部屋はとても明るく照らされていた。

ふと、ソファァーに目をやると恐らく目的の人物であろうお方が寝ふけていた。

起こそうか迷ったところで、こちら時間も時間が押していることを考え起こそうとそばに近づく。

あれ・・・？こいつどこかで・・・。

見覚えのあるような顔立ち。

しかし、起きておらず、髪の乱れようで相手の顔がはっきり見えなため思い出すことが出来なかった。

考え事に耽っていたとき、腕をつかまれ、先ほどまで目の前のソファァーで寝ていたはずの人物がいたソファァーへと引き倒された。

勢いと、急のあまりか、一瞬息がつまりソファァーに倒されたとき咽^{むせ}、咳き込んだ。

「ゲホッ・・・あ・・・？」

「あんさん、誰や？」

関西弁らしき言葉で、誰？と問う男。

端正な顔。限界まで細められた吊り目。眉間には皺が寄っていたが、怒りは含まれていない。

恐らく、目が悪いのだろう。

そこで漸く俺の口が開く。

「えっと、編入生の汐音朔羅です」

名前を言ってみると、相手は少々、顔の力を緩め考えていた。いや、思い出そうとしていた・・・か？

「ああ、編入生か。すまへんのお。つい、手荒な真似をしてもうたわ。大丈夫か？」

「あ、はい。有難うございます」

俺の上から退くと、苦笑し謝る。

そして、そこで俺は漸く思い出す。

関西弁に、本音を言わず、偽った笑み。表面上の行動。

こいつ・・・。

「何や？どないした？どこかぶつけてもうた？」

「いえ、初めましてといたいたのですが、どうやら以前にこちらの記憶では会ったことあるようでしたので、驚きました」

「え、何？わいに会つとるん？すまへんなあ。覚えてへんわ。何処で会ったん？」

「以前1ヶ月ほどお世話になりました。覚えてませんか？仔猫、ブルーを」

相手の男の顔が強張る。

仔猫の「ブルー」。

この男が俺に名づけた名。

1ヶ月ほどこの男の下で生活していた俺は、その時色々世話になった覚えがある。

家にいてはつまらないと思うようになった、当時小6の俺は1ヶ月ほど家出をした。

そのときに世話になったのがこの男ということ。

俺が家出をした理由は面倒になったからだ。

周りは俺に対し媚を売り、大人の癖して子供にへこへこ頭を下げる自分の地位を安泰しようとした。

「碧河家」、次期当主という名目で置かれていた俺に対し向けられるまなざしはそういった類のものでしかなかった。

友達と呼べるものは全て、「仲良くしとけ」などと大人に言われ見掛けが異常な俺にムリに付き合ったものばかりで、うんざりだった。

だから、嫌で嫌で仕方なかった、鳥籠の中から俺は何も考えず飛び出した。

そして、町へと行き羽を広げた。

当時、小6でしか何も持たず飛び出した俺。

下界の空気に触れることなど殆ど無かった俺にとって道の世界であり、当ての無い世界だった。

彷徨い、ふらふらと歩いているうちに俺は初めて恐怖を味わうこととなる。

現在進行形で今の俺にも言われる単語。

「不良」との出会いだ。

過去？

ドンッ

下を向いてただひたすら走っていた俺は、前を向いていなかったため何かにぶつかった。

「ああ？」

それは俗に言われる「不良」。

見かけは派手で、アクセサリーがジャラジャラと手、足、首、耳、鼻、口についている。

チェーンが揺れ、こちらを睨む男。

「餓鬼が」

はっとしたときには俺は吹っ飛ばされていた。いくらなんでも体格差で負ける。

それに当時の俺には力など無かった。

常識以上の頭を持っていたのに、外界の常識、知識など全く持ち合わせてはおらず、「喧嘩」ということすら知らなかった。

大きく蹴り飛ばされ、俺は派手にすっ転ぶ。鳩尾に近い、腹を蹴られ胃液を吐き出した。

道の真ん中で派手に蹴られ、殴られ、意識が遠のく中周りの視線を見た。

明らかに自分に向けられている視線。

哀れなように、かわいそうに向けられる視線。

媚びうるような奴らよりはいくらかマシ。だが、見ているだけで何もしない愚かな人間ども。

人間なんて信じない！

嫌いだ・・・

あんな奴らなど・・・

僕は・・・僕は・・・

何のために、今此処に居る？

手を差し伸べてくれるものが無い。

僕一人で・・・何を・・・

「そこら辺にしときや。周りに迷惑やろ」

不意に、自分を蹴っていた男の攻撃が止まる。

先ほどの言葉が、自分を蹴っていた男に向けられた言葉だとするとこいつは「偽善者」？

愚か愚か愚か愚か愚か————

僕を助けたところで何も無い。

こんな餓鬼一人巻き込まれた一方的な殴り合いを助けたところで得られるものなど何も無い。

強いて言えば周りの関心。

どうせ、止められたところでこの男に殴られ尻尾巻いて逃げるが落ち。

そう。

それしかないだろう？

無力さを見出され、自分も愚かなものだと思った。

「そないな子供に手あげるちゅうんは大人気くない？見てて気分わるうなるわ」

「ああ？黙ってろよ！」

男が朔羅のそばから離れ、男に殴りかかる。

男はそれを上手いこと避け、相手の足に、自らの足を引っ掛け倒した。

「わいが誰知ってるんか？」

やや面倒くさそうに、俺を殴っていた男に問う。

「ほんまはあんま身分晒しとうないんやけど、仕方あらへんか」

へ垂れ込んでいる男に向き、告げる。

最終警告。

「このガキに次手え出してみ？赤狼せきろうが黙つとらへんってな」

「赤、狼……」

男はその名を聞くと、すぐさま地を這うようにし逃げ帰った。

過去？—2

「大丈夫か？」

傍に蹲り、こちらを伺う男。

起きる気力も無い朔羅はただ、霞み、意識が遠のきそうになる中で男を見ていた。

「ぎぜんしゃ・・・」

そう、呟くと、朔羅は意識を飛ばした。

「ん・・・・・・・・あれ？」

静かに目を覚ますと、白い天井。

自分はベッドに横たわっており、その場所、空間は見知らぬところだった。

すぐに、バツと跳ねるように起き上がると、辺りを見渡す。

何もかもが知らぬものだらけ。

窓があり、そこを覗けば・・・・・・・・

「高・・・・・・・・」

地上から30mは離れているだろうと思われ、町らしき場所が一望できた。

ガチャッと音がすると、男がこちらに気づいた。

「何や、起きとったんかい。飯あるんやけど、喰う？」

男に拾われた。

そう、理解した瞬間だった。

偽善者呼ばわりした自分が情けなく思えた。

助けるだけ助けておいて、後は放置。

そうするかと思っていた。そうするとは思えなかった。

此処が何処なのか分からないが、男がいることからこの男の自宅を思われる。

つまり、何処のガキかも分からない自分を拾い、態々自分の家にまで連れ帰り、看病した。

そこまでする偽善者が何処にいる？

いるかもしれないが、綺麗に丁寧に治療されており、ベッドに寝かされており、飯まで用意されている。

そこまでする偽善者はよっぽどの人間しかないと思う。

俺の目からは自然に涙が溢れ、その場に蹲る。

男が俺にかけよりどうしたと話しかけるが、俺の涙は止まらない。

「ふっ・・・えぐっ・・・うう・・・」

「ほらほら、泣くんやめい。泣かれるのがいっちゃ辛いわ」

優しく包むように抱きとめ、背中を擦る。

何もかもが流れ出るように、涙は流れ続けた。

過去？ - 3

「落ちついたん？」

静かに問いかけられ、コクリと頷いた。

テーブルに並べられた色とりどりの食事。

普段食べていたものとは違う料理が並んでいた。

とても美味しそうな匂いと食欲がそそられる色。

「い、ただき……ます」

箸を取り、恐る恐る手前のものに手をつけ口に運ぶ。

思わず、驚きと笑みがこぼれた。

「美味しい？」

「美味しい……」

「良かったわ。わいの味付け、よく濃いと言われるからどうしよか思
うたんや。仰山あるでたくさん食べ？」

俺は素直にその言葉を受け取り、今までにこれほどまでにがつついた
ことはないだろうと思えるくらいの速さで食べ続けた。

「よお食ったな〜底なしの胃袋ってやっちな」

片づけをした後、静かに、リビングのソファに座る。

というより、こっち来いといわれ、強制的に座らされたといったところ。

「んで、家はどないしたん？何で、あの時間に町におったん？」

尋問。

来ると思った。見知らぬガキを何時までも預かってくれるわけが無いし。

「いいよ。もう帰る。ありがとう」

スツと立ち、帰ろうと玄関へ行こうとしたが、男に止められる。腕をつかまれ、またソファに戻された。

「待ちい。家が嫌なら此処に居ってもええ。色々思いつめとったんとちゃうん？」

「何故」

「ん？」

「何故、貴方は俺を引き止める？何故、どこぞのガキとも分からない俺を家に置こうとする？俺を匿ったってお前が利益を得られるとは思えない」

男は俺が言い放った言葉に目を丸くした。

子供が発する言葉ではない。重々承知していた。だが、それが俺だ。大人と同等で常に真っ直ぐにいなければならぬ。ガキだと……子供だと扱われないように。

それが当時の教育。爺による……。

「はぁ……ませたガキやんなあ。ほんまに小学生かいな。わいはお前の家のことは知らん。けどな？すんげえ辛そうにしたり、どうでもいい思うてるような目してるガキ、見てたら放っておけへん。」

わいがそうだったように、絶望しきった目、信じない目とかな見てるほうが辛いねんで。わいでよければ話して欲しいんや。んで、自分でええ頃加減になったら戻ってもええし。な？」

「俺は身元の関係上、面倒なんだ。貴方にも迷惑がかかるかもしれない。それでも俺を匿うというのか？」

「どうでもええねんで。お前がどこの誰だろうとお前はお前やろ？たとえ犯罪者であろうと、まだ未来あるもんを放っておけへん。それがわいの道理や」

「人間というものは分からない。貴方みたいな人は初めてだ」

「ほんで、どないするん？此処に居るか？」

「勿論。だが、知らんぞ。俺の家は何をするか分からんからな」

「上等」

笑みを浮かべ、まるでそれをゲームのようなものと楽しもうとしていた。

再会

「ブルー？マジ？」

「マジのマジ。見かけは違うけど」

驚きを隠せないのか、固まったままだ。

そして、漸く動き出したかと思ったら抱きついてくる。

「久しぶりやのお」

「相変わらずだな。赤狼」

「本名知ってるくせになんやの。他人行儀みたいに」

「はは。分かったよ。狼^{ろう}」

安心した子供のように、強く抱きしめられた。

昔はこいつに子供じゃない子供扱いされていたが、今ではこっちが大人なのに子供扱いをしている。

「ほんま何年ぶりや？噂だけは聞いたけど、此处2年くらいばったりやったる？」

「イギリス行ってたんだ。イギリスの大学に講師としてね。講習会やらなんやら色々回って挨拶とかしてたら2年経ってたんだ。急だったから一部の人間にしかそのこと言ってなかったし」

「そうやったんや。まあ生きとったんやでええか」

「なんだよ、それ。まるで俺が死んだみてえじゃん」

「町の裏では、噂では“碧は死んだ”ってことになってる。阿修羅も動かないし、情報は回らないしで」

勝手に殺すなって言いたいところだ。

それにしても、まさかこいつが此処で寮監なんてものをしていることに軽く驚いた。

「何で、狼は此処に居るんだ？」

「んー？あー色々あってな。此処に居る奴で知り合いが居てそいつに呼ばれて此処に居るんや。大した理由はあらへんで」

「そ？でも、狼が寮監なんてねえ・・・此処の習慣には？」

「慣れっこやて。わいの容姿、自分で言うのもなんやけどええほうやろ？やから、女は当たり前前に男も寄ってくるんよ。せやから、バィヤ」

「へー。あ、そうだ。んで、俺今日から此処の生徒だから、暇なとき来ていい？」

「ええよ。ブルーなら何時でも歓迎や」

「ブルーやめろって。今の俺は汐音朔羅。そっちの名前で好きに呼んでよ」

ブルーは仔猫のブルーであって、今の俺には似つかわしくない呼称だ。

それに、今更ブルーといわれると少々羞恥を覚える。

「汐音朔羅ね。見かけどおり猫被り中なん？」

「そうそう。本名、見かけ、戸籍含め全てを偽ってね」

「何や、目的でもあるん？」

「いや、親に遊ばれるためと、過保護な従兄弟の所為かな？」

変装を解くなと泣きつかれるほど言われれば断りようが無い。

「バレた時どないすんねん？朔、見た目はええんやで仰山引っ付いてくるで？」

「知らん。好きにさせとくかな」

「まあ、朔っちゃ朔らしい答えやけどさ。色々面倒やないん？此処、色々制度ある所為で、鬱憤がたまりに溜まってる奴いっぱいおるしな。素顔ばれたら狙われる確立100%やで？」

「つか、俺の容姿は問題外だろ」

「自覚せえって。昔もそうやけど、今は美人さんやろ？結構言い寄られたんとちゃう？」

言い寄られていないといえ嘘になるし、寧ろ自分でも何故か分か

らないほど男からも女からも言い寄られていた覚えがある。
それも向こうでも。

部屋（前書き）

お久しゅうございます．．．．．

問題は．．．．．ない？はずですが、他から見れば「おい！」と突っ込みを入れたくなるほど．．．．（多分）、私には問題があるそうです．．．．。

うん。此処で更新をしているほど暇は無いかもしれません？

まあ、そのときはそのときで．．．．何とかします。

何とかなるでしょう？ W

気ままで、気分で．．．．やっていききたいと思います。

部屋

「ほら」

「ん。サンキュー」

狼らしい、緑茶を淹れてくれた。

狼の淹れるお茶は、お湯の温度、茶葉の蒸らす時間など、程よいタイミングで淹れてくれるためとても美味しい。

猫舌であるため、熱々のまま飲むということが出来ないのだが、冷めても美味しいというのが狼のお茶の特徴。

緑茶だけでなく、抹茶もすごく美味しい。

「ああ、そうや。寮のことやったな。えっとな、表向きからも分かったんと思うんやけど左右両サイドと、縦で学年クラスで分かれてんや。1階が、フリーロビー兼寮監室と救急医療室。2階に共有バススペースとシャワールーム。3階が一年生ホール。4階が2年、5階が3年や。んで、6階が生徒会ホールな。6階だけ立ち入り禁止やで、気をつけてな？屋上に続く階段ならあるから、5階までエレベーターでいって、5階の非常階段から行けばええから。ああでも、特別やで？朔だけ。鍵渡しとくさかい、自由に行きや」

「ありがと。なら、部屋行くから鍵頂戴」

「これや。理事長直々に渡しに来るもんやから何や思ってた。朔の従兄弟なんやな。霧君」

「うん。過保護な従兄弟。でも頼りにはしてるよ。あれでもかなり

頼りになるから」

「霧君に頼めんことあったらわいに言ってもええからな。ほな、いっついで」

「行ってきますー」

懐かしい感覚に包まれ、見送られる。

狼は相変わらずのままで、今までどおり俺と振舞ってくれる。

人間不信のトラウマから救ってくれたのは紛れも無い狼だった。

「此処か？」

聞いた番号と、部屋に掲げられている番号を確認すればそこで間違はなく、ドアノブの下のキーの鎖しこみスペースにカードを鎖しこむ。

ピツという電子音の後、赤のランプが緑に変わったことを見るとロツクが外れる音がした。

「失礼します」

自室とはいえ、同室者がいるのであれば急に挨拶も無く入るのは非常識だと思い「お邪魔します」では可笑しいかと考え「失礼します」と言ってみた。

電気はついており、同室は居るということが見受けられるが、本当に居るのかどうかは不明だ。

「そういえば、個人スペースがあるとかどうか・・・」

キッチンと、バス、トイレがあり、リビングと、個人スペースが2つあると聞いている。

だとすると・・・。

俺の部屋どっちだ？

「勘で・・・、左にするか」

部屋に入って直ぐに、リビング、その向こうにキッチンがあり、反対側に風呂とトイレ。

そして、部屋の置くに二つドアがあるだけの微妙な廊下。

両脇にあり、左右でどちらかというわけだが左を選んでみる。

ダンボールが転がっており、棚と机とベッドと。

入学式からこれまでにダンボールを放っておくことも無ければ、机の上、棚の中が空っぽであることも無いはずだ。

間違いなくこの部屋は俺の部屋であることが見受けられる。

個室自体にもプライバシー漏洩防止のためか鍵がついている。

ただ、鍵がどれかだ。

「あとで狼のところ行くか」

部屋の片付け。

物を片付けるだけだろうが、面倒くさい。

ガタンッ

何かがぶつかったような、落ちたような音。

同室者か？と思い、ドアを少し開け、その隙間からのぞく。

陰湿的だが、引っ込み思案であれば授業をサボることが出来るかもしれないという策だ。

銀髪、吊り上がった細い目、口と、目元にピアス。

ガッシリしているが、胸板が厚いというわけでもなく華奢というわ

けでもなく。

日本男児らしい体つき。

それでいて、モテ要素満載の容姿。

こちらに足を進めてきたため、慌ててドアを閉め、鍵をかける。

カチャンという音がしたので、恐らく相手に居ることはバレたかもしれないが気にしないことにする。

一々気にしていたら埒が明かない。

「って、此処でお坊ちゃま校のはずだよな？」

不良が居て？それでもって、普通に着崩して？

将来大丈夫かなのだろうか。日本の未来。崩壊の危機では？

本当に。

学校どころの話ではなくて。

近日本未来崩壊。

「気にしない。気にしたら負けだ」

恐らく水谷のように普通の奴も居るはずだ。

水谷がいるのだから。

同室

「あ、えっと、どうも?」

危機………だろうか?

同室者が部屋にこもるだろうと思っていたが、予想は外れた。狼のところへ行き、渡し忘れたであろう鍵を取りに行ったのであるが問題は同室者と顔をあわせないように帰ってこれるかだった。

「チッ」

期待を削がれたようですみませんねと心底思う。

俺だって好きでこの格好をしているわけではないのだから。

さっさと部屋に戻ろうとしたが、それを同室者が止める。

「おい、名前も言えない非常識野郎なのか?」

非常識。

この男からその言葉が出るとはふざけるなと思いたい。

「顔あわせて最初に舌打ちをした貴方に言われたくないですよ」

「悪かった。俺は楠見禾李^{くすみかい}。で、テメエは?」

「汐音朔羅です。大体部屋に居ると思うので気にせず生活してください」

「何、お前最近言う、引きこもりって奴？」

「そうですが何か？」

「普通自分で言わんだろ。おもれえやつ。見かけはおどおどしてそうなのに口を開けば生意気。外見と中身のギャップが激しすぎるだろ」

「失礼な方ですね。僕は部屋へ戻ります」

今度こそ、そういつて、部屋へ戻る。

失礼極まりない。

「楠見」という名。

X S U M Iグループ総帥の名。つまり、あの男はX s u m iグループ総帥と何らかの関係があるということだ。
跡取りといったら笑うしかない。

ヴーヴーとバイブレーションが鳴る。

携帯を取り出すと通話ボタンを押した。

「もしもし？」

<碧? 昂だ>

「ああ、何？」

珍しい。

昂の方から電話がかかってくることは珍しい。よっぽどのことではなければかけてくることは先ずない。

＜集会のことなんだが、魁が来れないから中止にしてー！っと言って来たんだがどうする？＞

「無視」

＜了解。自業自得とでも言うておく＞

あっさりと返事をくれてやる俺に対し、昂もまたあっさりと会話を切った。

魁の我侭は今に始まったことではない。

「宜しく。そうだ。昂、集会のときにさちよい重要な話するからそれだけ魁に後で伝えておいて」

＜重要なこと？なんだ？＞

「それはお楽しみに。じゃあな」

＜ああ＞

ツーツー

まあ、いいよな？そろそろけじめの付け所だろうし。皆が皆、暇というわけじゃないだろうし。

魁は泣きつくだろうな。
澄とかはどうだろう？

同室（後書き）

〇〇の危機。

まあ、どうなるかは知ったこっちゃないです^^。

登校

夜は食べない。

というより、食べられない。

胃がもたれ、中々寝付けなくなるからだ。

睡眠不足など笑える冗談。食事を取るくらいなら俺は睡眠を取る派だ。

朝、目が覚めると時刻は午前7時を回ったところ。

正直学校には行きたくない気持ちで、このまま休みたい。

だが、休んだら休んだで色々と周りが煩そうにする気がして（特に霧）、仕方なく用意を始める。

学校の予鈴がなるのは8時半。授業開始は8時45分。

教室までの距離を歩いたとして、10分。

現在時刻が、7時10分。

8時半までに着けばいいのだから、2時間近く暇がある。

もう一度寝るしても時間が足りない。

この微妙な時間をどうもてあますか、考えた。

「こんなもんか」

結果。

久しぶりにきっちりとした朝食を作ることにした。

玄関に靴があったため、同室者の楠見禾李はいるようだがその存在はそこらにおいておき、キッチンを色々と漁り在り合わせの材料と、あるだけの器材で朝食を作った。

在り合わせといえど、きっちり何から何までありそれほど困るものどころか、これからこの材料で何か作りたいと思えるほどある。

ありすぎるのは酒。

まあ、自分も嗜み程度に飲むため此処で飲んでもいいということが証明されたからよしとした。

「何やってんだ？」

「何って料理ですが？」

漸く起きたのだろう、同室者が、リビングと廊下を遮るドアに凭れ掛かってこちらの様子を伺っていた。

「ふうん。美味そうだな」

「貴方の分はありませんよ？」

俺はお人よしでもなんでもない。

腹が減っているなら自分で作って食えという、人のことに一々干渉してられない主義。

人助けは別。さすがに、人が困っているときに見て見ぬふりは後味が悪い。

自分で最低限出来ることは自分でやって欲しいだけ。

「って、何摘み食いつてるんですか！」

「いや、美味そうだからついな」

バカか！

というか、犬か！テメエは！

「お腹が減っているなら自分で作って食べればいいでしょう！何故

態々僕が作ったものを食べるんですか！」

「いいじゃん。別に」

よくない。

俺の飯が減る。

「なら、作れ。お前以外に料理上手いな」

「命令口調はやめてください。きっちりお願いしてくださいませんか
と僕はやる気が起こりません」

上手い下手どうのこの褒め言葉ではなく、お願いの仕方に対して
文句がある。

褒められたって自分にとってそれが普通であり、一般と思っている
からだ。

登校—2

「そういえばさ、お前俺のこと怖くねえの？」

「何故です？」

・
・

仕方なく朝食を作ってやった。

犬のように、貪り食う姿でも男前の容姿には敵わず、どの行動全てもいい男に見えるという。

「お前、特待生だから一般だろ？俺の容姿って、世間じゃ不良って言われる類だし結構中身も暴力的だったりするんだけど？」

「それなら平気です。貴方が仰ったとおり、僕は特待生の一般人です。なので、それなりの経験があり、それなりに色々なものを見てきています。この監獄とも鳥籠ともとれる学園で過ごしている貴方達とは違ってね。不良なんてそこらにゴロゴロいましたので、今更如何でも良いことです。なので、貴方が例え、見かけがそうでも、中身が暴力的でも関係ないことです。それに、中身最低の方が僕の料理を素直に認め褒め、食べるとお思いですか？」

「いや」

「でしょう？だから、僕は貴方のことを怖いとも軽蔑する対象とも見ません。ルームメイトであり、これから、卒業するまでの付き合いなのですから、避けようがありませんしね」

「・・・・・・・・お前すげえな」

「何がですか？」

当たり前の事実を言ったままで、数秒置いてから楠見が何故か「すごい」といったことに対して疑問を抱いた。

「だってさ、俺見かけ不良っぽいけどいいじゃん？んで、名前言えば利用価値結構高めだからさわんさかよってくるのよ。女も男も。お前、そんなそぶり一切見せねえんだもん。それとも俺の家知らない？」

「僕は別に貴方のことを利用しようなどと考えません。それほど金に困っているわけでもありませんし。容姿がいいのは認めますが、例えば貴方が、XSUMIグループ関係者であろうとすね僕には全く関係ありません」

「XSUMIグループ総帥の息子だよ。それでも俺に媚売らない？」

「貴方は過去から現在に至るまで、媚売られ続けたのですか？親しい友人は？」

「親しい、ね。犬猿の仲の連中なら居るが、他は媚売る奴らばっかだ」

親しいの後に一つ間を置き、そういった。

寂しがりや。

兎というよりは犬で、自分を利用しようとする人間が嫌いなのに嫌

いになれず、遠ざけることも出来ず、それよか、人と近づき、真に友好を深めたいと思う。

俺とは違って、人を恨めず、蔑めず《さげすめず》というお人好しさ。

「褒め称えてあげましょう。僕も昔そうでした。しかし、人を好きになろうとは到底考えようとはしませんでした。自ら人間と距離を置き、近づくものは近寄らせないようにする。人を突き放し、己のみで生きていこうと。貴方は立派です。己を利用するために近寄ってくるものを素直に受け入れ、恨めず、憎めず、自ら歩み寄り仲を深めようとする。例え、利用されようと。お人好し過ぎますよ」

「お前もあつたのか？一般じゃ」

「碧河家をご存知でしょう？僕は本家の第一子です」

「はあああ！？碧河家？あの北郷ほんじょうと並ぶ！？」

「はい。驚きでしょう？まあ、碧河家の者であるから媚売らないというのがありますが、一般であっても僕は媚を売りませんし売ったところで何かなるというわけではありませんしね。プライドが崩れるだけです」

「お前………そういや、名前は？」

「母方の旧姓を取りました。本名は碧河朔羅です。貴方ですから晒したのであって、決して他言無用ですよ？」

納得のいったような、納得のいかなかったような曖昧な顔をして呆けていた。

朝食が済み、片付けた後時計を確認すると丁度いい具合の時間で、部屋を出た。

登校ー2（後書き）

突如出現。

北郷家。一体どこの誰なんだろうか？（何となく入れてみた家名・・・）

まあ、ストーリーに沿って、色々いれていきたいと思っています。しかし、まあ、次から次へと新キャラが出てくるもんだ。

大変大変。急がし急がし。

キャラプロフは後に更新して行きます。

問題（前書き）

問題。

えっと、朔が授業中色々問題といたりしますが、自分は中学生の問題でも解けないので、朔（理想）が解くような問題は全て架空です。なので、適当です。

はい。頭が悪い鼎都です。

とりあえず、その辺り、スルーしていただけるとありがたいです。

問題

「汐音」

またか。

飽きずに、懲りずによくやるものだ。そんなに楽しいかね？ 一人の生徒を集中的に当てることは？

「ゝであるからにして、ゝはゝとなり、 $A \cdot B$ はゝとなる」

面倒くさい。

次から次へと授業が変わっても、教科担任の先生からの指名は止まらない。

現国も、数学も、現社も、全て。

編入試験満点通過で、一般だからってこれほど当てるものか？

寧ろ、俺があたる度に連中のプライドと地位が崖っぷちに近づいているだろうに。

そこらの生徒は、べちゃくちゃと話したり、他ごとをやったり、居眠りしたりと個人様々。

誰一人として、真剣に授業を聞いている奴はいない。

それでもって、偏差値が高いというのだから謎だ。

部屋かえって勉強するにしても、高校の学習以上に範囲が広く、一つ一つの問題が通常からかなり発展した問題ばかりを出すらしい試験の対策が取れるのかどうか不思議だ。

「汐音。お前頭良すぎね？半端ねえじゃん」

「あれくらい解けなければ編入試験なんて合格できませんよ」

正直言って、あれは大学センター試験辺りとか、大学生が解く問題だ。

または大学生であっても解けないか。

「つか、腹減った。飯行かね？」

「そうですね。僕も少々お腹がすきましたし」

「おい」

「楠見君どうしました？」

まさかの楠見登場。

目つきが悪いというのは本当で、慣れてなければ見た瞬間に逃げ出したくなるだろう。

「く、楠見さん！？」

ほら、水谷が驚いてる。

見かけは確かに怖いんだって。だから、少々顔の力緩めなさい。

「飯行くぞ」

「水谷君もいいですか？最初に誘っていただいたのは彼なので」

「ああ」

「行きましょう」

驚きのあまり呆然としていたが、俺の言葉で漸く反応し、楠見の後ろを歩く俺の後ろを肩身縮こまりついてきた。

「何にします？」

「日替わりでいいや」

「水谷君は？」

「お、俺は、え、A定食、で」

緊張と恐怖で、噛みまくり。

「では、僕は中華の小籠包のセットで」

それぞれ、好きなものを選ぶと楠見が自ら頼んでくれた。
一応、信頼され、信頼し、関係が深まっているとみていいはず。

「汐音」

「なんです？」

「どういう関係だよ！」

「ルームメイトですが？」

「だ、だって、あの楠見さんだぞ！？XSUMIグループの次期当主の」

「そうですね。ですが、関係ありませんよ。同級生に変わりないのですから。家柄が如何とかの話なら、貴方に既に媚売ってるはずでしょう？」

「そ、それもそうだけど！」

ここまで、慌てている人間始めてみた。
面白い奴。

「何を話しているんだ？」

「水谷君が、この食堂の人気料理のランキングをつけてらしたので、それを見せてもらってました」

「ふうん」

どうも、不機嫌だ。

まあ、確かに寂しがりやの彼抜きで話をしていたのは悪いと思うが、不貞腐れるほどのものでもないだろう。

問題（後書き）

うん。

前に続き、楽しかったです。

なんでしょうね。

自分で書いてて楽しいって。

楽しいから書くのであって、書くから楽しいのであって・・・不思議です。

楽しいことのみ求め、面白いことのみ欲する自分。

自由気ままに、投稿し、話を創り、楽しんでいるこうと思います。

日常でも、ああ、小説書きたい！小説書きたい！と唸ってますw

感知（前書き）

思いました（再）。

前書きと、後書きとこういったスペースありますが、私・・・・

日記風につかっちゃってますね。

どういったことを書けば？という・・・・。

書かないほうが？

いや、でも・・・

全ての穴（答案？用紙以外）を埋められるなら埋めないと気がすまない
鼎都です；

お付き合いをお願いします！（w）

感知

「何故、不貞腐れているのですか？」

「別に」

軽く、垂れた犬耳と、ゆらゆらと寂しいとかお預け喰らったような感じで揺らした尻尾が見えた気がする。表現が可笑しいかもしれないが、現実。尻尾がゆらゆら、耳がピクピク。

何故か見てて可愛い。

「そうですか」

現在午後、1時半を回ったところ。

今日は、特別日課で半ドンである。

午後の授業はなく、部活動に行くものは部活動へ。他は帰宅するという形だ。

まだ部活に入っておらず、入る気も無い俺は帰宅部らしい楠見と下校中。

校舎から寮まで、同じ敷地内なのに、とんでもなく離れている。

「お前、頭良かったよな？」

ふと、楠見からとんだ質問がきた。

頭がいいか、悪いかといえば、一応は大学を卒業している頭を持っているため、肯定。

「はい？ 一応、編入試験は受かるほどの頭は持っていますが」

大学卒業などといったら、可笑しな話になってしまう。

だからといって、嘘をつくほどのものでもなく、スルーする形で流す。

「今度の定期末テスト、俺やばいから、教えろ」

「いいですよ？ 勉強が出来ないのですか？」

「何で、あれが理解できるのか分からん」

「科目は？」

「全部だ」

意外。勉強が出来る出来ないの以前に、理解できないことを前提に努力しようとしている。

偉いこと。

しかし、全般とは、また困ったものだ。

全部出来るが、どこまでが範囲なのか授業をまともに聞いていない俺。

寝たままずっと起きない楠見。

授業で、当てられたとしても、それは俺をはめるための問題であり

範囲がぶっ飛んでいる。

あとで水谷聞くか・・・。

静かに、眩き帰路を辿った。

「おかえり」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「え、無言！？ってか、無視！？酷いな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・え」

漸く、反応したのは楠見だ。

それは仕方の無いことだろう。現実離れた者が今、目の前に存在しており、何故か自分らの部屋に堂々と居座っているのだから。

「何故居る？一真^{かずま}」

「愛しの朔羅ちゃんに会いにきたんじゃん！ダメだった？？それにしてもまた、王道な変装だね。まあ仕方ないけどね。朔羅ちゃん、そういうのしてないとバレちゃうもんね」

「今すぐ出て行け。そして、その煩わしい顔を二度と見せるな」

「朔羅ちゃんったら相変わらずだね！イギリスから帰ってきたって聞いて飛んできたのに！でも、そんなところが好きだね」

一真という名の少年。

黒髪に黒目のそのらの一般人と何ら変わらない容姿の持ち主だが、よく見ると顔のパーツ一つ一つが綺麗、美人、可愛い容姿に値しておりこの顔で落とした男は5万と居る。

女と口論になって乱闘騒ぎまで発展したのも過去何十回に登ることやら。

「はぁ・・・・・・・・」

「汐……音。お前口調」

「あ？ああ、素だよ。敬語は一応、身の安全と正体がバレないため。どうも、こいつ相手だとな」

「何、朔羅ちゃん学校では敬語なの！？うっそー！見てみたい！僕も入ろうかな」

「止めろ。俺の権力を振ってでも止める」

「酷いな」

拗ねるような態度でも、それは騙し。

こいつは、将来立派な詐欺師になれると思う。

犯罪だが、その容姿と演技力と頭脳をもってすれば何にだってなれるだろう。

それに、権力もある。

「今日は何の用だ」

「あ、えっとね、うちで主催するパーティーに招待しにきたの！朔羅ちゃんって昔からだけどパーティーに出たがらないよね！でも、そのうち、碧河家次期後継者としての顔見せで出なきゃいけないのに、意地っ張りなんだから！」

「煩い。別にいいだろ。俺がいつ社交界デビューしようと俺の勝手。一々、纏わりつくような周りの視線を浴びてられない」

「ホント、相変わらずなんだから。ところでそちらは？」

「ああ、楠見禾李。XSUMIグループの後継者。んで、俺のルームメイト兼クラスメイト」

「そう？君がXSUMIの。北郷財閥が一子北郷一真！よろしくね」

楠見に差し出した手。

楠見は惑うように、半分無意識でその手を握った。

社交辞令の挨拶。基本的なものだが、規模が違う。

なんせ、日本のトップ、または世界の5本指の中にいる北郷と握手を交じわせているのだから。

感知（後書き）

出てきました。本郷。

おちやめ？ なキャラっぽいです W

予感

「んで、ご両親にはちゃんと許可貰ったから絶対来てね！勿論、碧河の名は言わなくてもいいけど僕の友達として！」

「面倒くさ………」

勝手な一真の行動と、こちらもまた勝手な両親の承諾により、5日後の日曜に開催される北郷家のパーティーに出席することになった。今まで、学業関連のパーティー以外、行ったことのない俺にとって面倒極まりないこと。

今回に関しては後に拘りを持つであろう企業や、財閥が参加する。碧河家と名乗らない俺を回りはどう扱うか見ものといっちゃ、見ものだが、いい気はしない。

「禾李君も来る？美味しいご飯いっぱい食べれるよ！！」

一真は大の大喰らい。

1人前では全く足りず、腹八分目といいながら通常の4倍は食べる。底なしの胃袋を持っており、鰯腹食っても、後々腹減ったとぶつぶつ文句垂れる。

根暗でないだけマシだが、元気すぎるのもどうかと思う。

「楠見、どうする？」

「え……いや、俺がいつでも」

「北郷家が招待すれば誰でもOK！契約とかは全部断ってるから媚売られるくらいだよ。それに、禾李君も朔羅ちゃんみたいに楠見家ということ隠せば関係ないしね！」

いつの間にか、「禾李君」と名前呼びをするほど人懐っこい一真。俺も、「朔羅ちゃん」と呼ばれて、いい気はしないが、言ったところで、無駄だと分かっているためそのままにしておいた。

この人懐っこさが、色々心配される面なのだが肝心の本人が全く自覚を持たないところで周りからは呆れられている。

長所と取れば、短所とも取れる一面。

それでも、俺が嫌わないのはやはりこの人懐っこい気楽で、気軽なキャラを気に入っているからだろう。

元気で明るく、単純でバカだがいい奴ってのは大抵のものが嫌わないだろう。

どうやら、考えに耽っていた合間に行くことが決定したらしい。

当日の衣装は北郷の自宅でどうにかしてくれるということとで、特に用意することはなくなった。

できれば、風邪でも引いて休みたい。

「似合うじゃん！朔羅ちゃんカッコいいよ！禾李君もカッコよすぎ
！」

「何で・・・・・・・・」

「だって、野暮ったい格好だと周りの注目浴びちゃうじゃん！それ
だったら多少目立つけど綺麗なほうがいいでしょ？朔羅ちゃんって
分からないように、髪染めてある程度髪形変えれば僕の友達A君が
完成！」

禾李君も男前ですごいね」

碧河学園正門まで、北郷の方から迎えが来て乗り込むと化粧道具が
目に飛び込み、きらきらと輝かせるといふより、目を爛々とさせた

女性が俺の手を引っ掴みさっさと座らせると事前に聞いていたのか鬘と剥ぐ様に取り化粧を始めた。

茶色の髪は黒に簡単に染められ、薄くファンデーションを塗られ、鏡を見たときは普段の俺とは全くの別人が映っていた。

化粧の力はすごいと思う。全くの別人に変えられるという、優れものの。

楠見も同じように、色々と手が加えられたが、元々男前の楠見は普段より色気？のようなものがUPし、色男っぽい感じになった。

「そろそろ始まるから行こっか！」

いつもの満面笑みを浮かべ、子供のようにはしゃいでいる。

すると、ふと足を止めるところを向いていった言葉に俺と楠見は絶句する。

「ああ、そうそう。確か、九条家の息子って朔羅ちゃんたちの学校の生徒会長してるんだっけ？彼も確か招待されていたはずだから来ると思うよ！」

「……は？」

予感（後書き）

第一章終了？

次から第二章に入ります。

というか、話が全く進んでおりません。

多分入学して3日かそこらだと思っています。

日にちとか全く気にしてないww

まあ、のんびりやっています。

- ・・・・今年の抱負が・・・今年中に一本終わらせる・・・
- ・不可能かも；

視線

――まあ、あちら何処のご子息かしら？

――カッコいいわねえ。

――パパ！あの人誰？

煩い煩い煩い。

周りの視線がうざい。

目立つのは俺じゃない。北郷家の子息である一真と、抜群の容姿を持つ楠見だ。

決して俺に向けられているわけじゃない。だが、こそこそと煩い。

そして、うっとうしい視線。

全て、俺の嫌いなもの。

「うぜえ」

「機嫌悪くしないでよ！パーティーなんて何時もこんなもんよ？朔羅ちゃんが正体を露にしたらもっと酷いかも！直ぐにお見合いとか

求婚を迫られると思うよ!」

「絶対晒したくねえ………」

3人で、固まり、バイキング形式になっている料理に手をつけた。どれもこれも最高級の材料が使われており、また最高のシェフが作ったものばかりであろうため、色とりどりでもれもこれも美味しうだった。

手短な料理を一つ一つ皿にとっては食べていった。

朝からこんな豪勢なものを食べるというのはどうかと思うが、パーティーの一環であるため仕方なしとする。

「ああ、久しぶり!」

すると、一真が誰かと話していた。さっきまでバイキングが置かれたテーブルの周りをぐるぐると回り、そのたびに口にもものと詰め込んでいたのに。

「お久しぶりです。元気にしていましたか?」

「うん! 九条君も元気そうで!」

・

九条?

あの九条か?

うっさいほどに俺を付回し、喧嘩を売り、俺様何様有様の九条か?

チラ見すると、その趣は間違いなくあの「有」である。

違和感があるのは「敬語」。

さすがの俺様九条でも北郷家には敵わないってか？

「ああ、紹介するね！僕の友達！」

・・・そういや、名前考えてなかった。

汐音朔羅だと、学園で万が一会ってしまった場合などが大変。

「碧ちゃんみどりと、禾李君！」

・・・・・・碧ちゃん？

「おい・・・」

「いいじゃん、いいじゃん！碧河の名前から碧！可愛いでしょ？」

そういう問題じゃない。

俺の沽券にかかわる問題だ。

「碧さん？初めまして。九条有紀です。以後お見知りおきを・・・」

甘ったるい声で、自己紹介をする九条基生徒会長。
気持ち悪くて、鳥肌が立ち一真の後ろに下がる。

「碧ちゃん？大丈夫だよって食われたりしないから」

「んなことされるか。ただ気色悪いだけだ」

学園で見た、水谷の写真ではムスツとした写真だけで、遠目に見ても不機嫌丸出しの顔が、パーティーではホストがする営業スマイルのようににこにここと笑っていて、気持ち悪すぎ。

喧嘩のときなど、ゲームを楽しむようにニヤニヤしているのに。

視線（後書き）

段々、朔羅のキャラが崩れている&文章が可笑しくなっている気がします。

何か色々と文法無視で書いていても、無視してください；
頭の悪い鼎都にはそれが限界です・・・。

機嫌

「疲れた」

「朔羅ちゃんだらないね〜若者らしくもってシャキツとしなきゃ」

「うっさいわ」

つか、一真にだけは言われたくない。

一真の歳は俺の一個下。つまり、高校1年生。

少しは年下を敬えといたいのだが、一真にとって自分にそういった意識がなくても相手⇨タメと頭の中で変換されているだろう。

大人相手にも、小さな子供相手にも対等でタメで話す。それが、たとえ社交辞令の中でも。

そんなことすれば、相手に失礼であるかもしれないが、意外に受けがいいというのが一真。

「俺、外行って来る。庭ならいいだろ」

「迷わないようにね〜」

「迷うかつての」

確かに、北郷家本宅はとんでもなく広いため、庭もとんでもなく広い。が、この歳になってまで迷子になるわけがない。

最悪、当たって砕けろ。数打ちゃ当たるだ。

「このワイン一本持ってっていいか？」

「あゝいいんじゃない？ 開いてないし。一本くらい大丈夫だと思うよ」

「んじゃな。終わったら電話しろ」

「了解」

パーティーが夜の晩餐会まで伸びる。プログラム自体がそうになっており、休憩を1時間から3時間ほど取ったと思うと、7時くらいから晩餐会が開かれた。

俺はそろそろ、胃が限界であるため寝酒一本で済まそうと思う。

時刻は午後10時を少々回ったところ。

初夏寸前の外は少々ジメジメと湿気を含む空気が肌にベタリとつくように感じられるが、時折吹く涼しげな風が心地よく中和していた。

「1996年産、ブルゴーニュか。相当なもんじゃん、これ」

10年に一回の良年といわれた年に作られたワイン。

ブルゴーニュはピノ・ノワール種、単一のため、ボルドーよりもビンテージの差が大きく出る。

1996年は良年といわれただけ、品質がよく美味しいと絶賛されている。

一度、ブルゴーニュの神様と称えられるアンリ・ジャイエのワインを飲んだことがあるがあれは本当に病み付きになるほど美味しかった。

丁度良い雰囲気、池の辺に腰を落ち着かした。
五月半ばの今、月が見ごろで満月には届かないが、月齢13歳ほどの丸い月が淡い光を放つように、池を照らしていた。
水面が空気の流れ、風の流れて波紋をたたせ歪んだ月もまた綺麗な
ものだった。

暫く、その景色とワインに酔いしれていると思わぬ来客。

「先客か」

「何か用？」

相手の気配に気づいたのはついさっき。

足音を立てず、そろりそろりと近づいてきたが、バレバレだった。

「牙向けるなって。本郷んとこの奴もいっただろ。とって食った
りしないって。いいの飲んでんな。俺にもくれ」

「自分で持って来い。つか、こっちくんな」

ゆっくりと近づいてくる有。

顔も見たくないというか、うつとうしい。

マジ、トラウマになるほど出会い最悪、再開最悪、今現在進行形で最悪だ。

「何でそんなに機嫌悪いんだ？」

「自分の胸にて当てて聞いてみる。心底、心当たりあるんじゃないの？」

2年前とはいえ、しつこいほど近づいてきたこの男は忘れられない。

「何、前に会ったことあったか？」

「うぜえ。教えてやるから俺に近づくな。つか、消えろ。マジ目障り」

ワイングラス片手に、相手を睨む。

有は俺から2m離れたところで突っ立っている。思い出そうとしているのか、表情が微妙だ。

「碧は仮の名。そして、紺碧の碧と書いて“あお”。思い当たる人物は？」

「……あ、お？阿修羅……のか？」

「ああ。分かっただろ？さっさと消えやがれ。つか、俺が行く。じやあな」

「ま、待て。碧？本当に？髪と目は？」

「このパーティーに参加するためにやってんに決まってるだろ。つか、触るな。虫唾が走る」

強く腕を掴んできた、有の手を振り払うとグラスとボトルを持ってさっさとその場を離れた。

最悪な出会い、最悪な再会、現在進行形で最悪な今。更に最悪。

気分が滅入り、さっさと帰って寝たい。寝酒が台無しだ。

余った酒は後日改めて飲むとしようか。

機嫌（後書き）

んー

これ引っ付けられるのだろうか？

毎回失敗してます。

受けの子が嫌っていて、攻めの子は溺愛。

そのまま引っ付かせるまでいけないんですよ。

いったことがあります；

というか、先ず完結させた話ありませんw

まあ、努力します・・・・・・

帰宅

「うっぜえ……………」

2年ぶりの再会で相変わらずの俺様っぷりで、機嫌上々だった俺を一気に転落させた。

恐らく、半目になっているであろう俺の顔は周りから見れば最悪の不良。

折角の寝酒が台無しにされさっさと帰りたい。が、そのためには一真に車を手配してもらわないとならない。
というよりか、この化粧をまずどうにかしたい。

「あつれー朔羅ちゃん、お早いお帰りで？」

「急な来客が来てな。さっさと戻ってきた」

「あ、やっぱり？さっき九条君が行ったから、多分……………そうかな？って思ってたところ。寝酒にはならなかったみたいだね」

「車手配してくれ。帰る」

「はいはい。また、参加してねえ」

「二度と参加しない」

周りから見れば、拗ねたように剥れる朔羅がとても可愛らしく見えるだろう。

自分の容姿、恋愛模様に鈍感で天然、無自覚な当の本人は全く気づかないが。

「まあいいけどね、表に車回しておくから好きなきときに帰っていいよ」

「今すぐ帰る。二度と俺の前に現れるな」

「それはムリ、愛しの朔羅ちゃんに一生会わないなんてムリだもん！」

ガキのようにはちゃける様子は本当にガキのようで、そこらの保育園児、小学生に違和感なくただ図体がでかいだけで特に気にすることなく溶け込めると思う。

「楠見、いいか？」

「俺は別に……」

「帰ろうぜ。さっさと寝たい」

「ああ」

表には、一真が言ったとおり、車がまわしてあり、乗り込んだ。
しっかりした、運転手で、全く気を使うことがなく、これ以上神経
をすり減らすことがなかった。

「おい、大丈夫か？」

「あー？ 大丈夫だよ。苛立ってるだけだから」

「あのクソが嫌いなのは分かるが、俺に八つ当たりは止めろよ？」

「誰がするかよ。そのクソったれが学園の会長であるだけで胸糞悪いわ」

「分かるけど、沸点上げてるだけだと何にもならないぞ」

「分かってる」

除湿と、冷房が効いた寮内は外から中へ入ると、涼しいが、少々歩いていれば肌寒く感じられ、薄めの上着が欲しいところだ。

帰宅届けを狼に渡し、楠見とともに部屋に戻ると化粧を、貰った化粧落として落とし寝巻き用のTシャツ、ジャージに着替え床に入った。

本日はあまり深く眠れそうにない。

今まで以上に最悪な一日を味わった気がする。

帰宅（後書き）

なんというか、日付がたつのが遅いくせに、話の中身が薄く浅すぎる・・・。

問題点。

深く、しつとり何とかしていこうか・・・。

突然（前書き）

お久しゅうございます。

少々おねむ状態＋苛々募りつつの更新です；

何故こんなにも運が・・・ないのか・・・ゲームぼろ負け；

突然

衣替えが終わり、夏服へと移行した6月上旬。

パーティーから、数週間を経て突然学級会が開かれた。

学級会といっても、皆が真剣に考えるものではなく適当な意見を出して、まとめて終わりのような簡単なものだ。

それもそのはず。

特典こそ付いてくるもの、2学期に行われる文化祭についての出し物の話だ。

どこぞの学校でもありそうな意見ばかりで、また他のクラスとも被ってそうな意見ばかりで学級委員が困り果てていた。

お化け屋敷、メイドor執事喫茶、巨大迷路。

全5日間。3日目までは学園内のみ。4日目は一般公開。5日目は後夜祭含め打ち上げのみ。

金持ちには金があり、暇であるためこの日程。

他の文化祭は恐らく2日間から3日間がギリギリだろうが、それでもまだ伸ばそうと考えているのが当学園生徒会だ。最低でも一週間伸ばせと言っているらしい。

それは水谷情報であるため、嘘か本当か曖昧だが、あの生徒会では色々言い出しては喧嘩して、やってるんだろいうな。

夏休みは、お盆以外は学校へ登校しなければならず皆で準備にかか
るらしい。

体育祭は毎年、文化祭と交互に行われるため来年になる。

2学期はハードスケジュールだ。

9月文化祭、10月ハロウィンパーティー、11月期末、12月ク
リスマス会。

毎月のようにあり、全てが全校強制参加であるためサボることが出
来ない。

一応特待生の俺は単位を落としてはならない。

サボればその単位がかなり落とされるようで、その制度にまた呆れ
た。

「出し物がまだ決まらないのですが……」

「いいじゃん。他と被っても」

「えーもうちょっと派手にやってもいいんじゃない……」

あちらこちらで意見が飛び交う中でも中々決まらない現状。

というか、金持ちたちの頭の中は当然金持ちらしく平凡でないため
ぶっ飛んだ意見が出るのだった。

たかが、5日間のために優秀な技術者を連れてきて色々作らせよう
としている。

自分達が作らなければ意味の無いことなのに、自分らは何もしず楽
しむことだけを考えている。

「なあ、汐音は何か無い？」

「僕はとくには思いつきません。それに僕の意見など反映されないでしょう」

「まあ、あんなだけ騒いでればな……」

家が何をやっているかによって、元々英才教育を受けていた彼らの能力は個々様々。

バラバラの状況で如何するか考えてみた……が、考えが付かない。

「喫茶店でしようね。妥当なのは。お化け屋敷でもいいのですが、設計が面倒です」

「だなくあー早く決まんねえかな」

ふああと大きな欠伸をする水谷を横目に窓の外を眺める。

心地よい陽気……。だが、室内に空調が利いているためそう感じられるのであって、恐らく外に出ればジメジメと梅雨らしい湿った空気が待っているのだろう。

梅雨は嫌いだ……。

「結局メイド喫茶？菓子とかジュースは手作りで、メイドをやる子もある程度決まって」

「メイド以外の方は店の設計から、装飾などをするのですよね？」

「んー面倒だなー俺は和菓子担当だし。汐音なんだっけ？」

「僕は裏方ですよ。皿洗いとか、掃除とかですね。表には出ません」

「それはそれで何か可哀想だなーその容姿さえ何とかすればいいのにな」

そうは言われましてもですね……そう簡単に晒せるような容姿じゃないんですよ……。

表立って行動することも、何かを人とするということも苦手だから丁度良い立場だと思う。

皿洗いなどそこの生徒はしたくないため、俺一人で出来る。
ある意味ラッキーである。

突然（後書き）

うーむ・・・・・・・・。

最悪ですね。はい。

話をごっちゃごちゃですよ。

恐らく期末2週間前。6月上旬です。

朔が入ったのは5月・・・・中旬？あたりかと思われ・・・・。

勉強（前書き）

どうもすみません；

約束どおり、今夜は（現在時刻 21..27）6P更新させます！

少々時間がかかろうと・・・たとえば・・・日付が変わろうと！

眠い・・・；

睡眠不足って嫌ですよね・・・

勉強

6月中旬あたりに1学期期末テストが行われる。

3日間かけて、主要科目から実技科目、更に新学校としてプラスされた部分のテスト。

主に、主要科目3教科、国数英。

必死に勉強している生徒がいる中、横目に暇を潰している俺。

一応、勉強はしているのだが注目を浴びつつ楠見に勉強を教えている。

一度、俺特製の要点問題を出してみたのだが壊滅状態。

どうしたらこのような点になるのか、考えてみたが答えは「バカだから」のみ。

発展どころか、基礎から丸つきりダメで1より前、0とか-1辺りから教えなければならなかった。

「だから、 x は此処に代入して y が○になるから」

「え・・・・・・・・」

さっきから、全く進まない。

高校2年の内容ではない。高校2年の問題なら少し赦した。だが、これは1年の初期の問題。つまり中学生レベルだ。

それでも解けない楠見は一体今まで何をしていたのだろうか？

「疲れた」

「休憩入れますか？」

「ん」

さすがに昼休みを丸々使ってまでやるのは酷だったらしく、今までの休み時間を潰して問題を解いてきた楠見が音をあげた。

昼を5分で終わらせ、さっさと教室へ戻ってきた。

校舎全体に冷房が完備されている中で初夏の暑さなど微塵も感じないが、外の様子でジリジリと暑さが伝わってくる。

「やっていますね」

陽気な声で、話しかける人物は勿論水谷で、あれだけ緊張と恐怖で震えていたのに慣れればこっちのものというタイプらしく慣れきった様子で楠見の傍へ自ら寄ってくる。

水谷はBクラスの中でも上の中にいるらしく、あまり勉強をしている様子は見受けられない。

余裕ぶっこいていると、下克上ではないが、追い抜かれるかもしれないというのに。

「汐音、基礎からで間に合うかよ？」

「それは楠見君の努力次第です。兎に角、基礎からやっていかなけ

れば応用など全く出来ません」

「むずい」

「にしても、よく続くな〜注目浴びてることわかんない？」

「分かりますが、それよりも先ずこちらです。期末まで時間が無いのですからさっさと行きます」

「鬼だな〜」

「如何とでも」

数学の教科書を借り、一つ一つ教えていく。

楠見も楠見で、自分に分かりやすいようにノートに書きとめていった。

意外だったのが、字が上手いこと、勉強は出来ないくせにノート纏めは上手いことだ。

新たな発見。

そして、期末に向け、音をあげるもの真剣に取り組む姿。一度集中すれば結構な時間ノートと向き合っている。問題も、詰まれば俺に聞き、理解すれば似たような問題を抜き出しそれだけを解き、絶対に解ける自信がつけば次の問題へと移る。

自分にあった勉強法を一応は理解しているらしく、ずっと続けていた。

なんだかんだいって、人間努力すれば出来るということ。

今までやらなかっただけで、いざやってみれば結構出来たりするも

の
だ。

勉強（後書き）

うつすー……

内容浅い。

……どうやったらもっと盛り上げられるだろうか？

ゲームに洗脳された頭で……。

必死こいて頑張ります；

結果

努力適ってか、補習教科は無かった。

それは勿論、楠見。

「俺、こんな点初めて見た」

「ガチ？」

楠見が自分の点数を見て、心の底から驚いている様子に水谷が反応する。

「どうやら本当のようですね。僕は大体思っていた通りの点だったので満足です」

「全部70前後。合計500きっかり。……計算してやってんのか？」

「いえ、とんでもありません。偶然ですよ」

数学？70。数学？72。現国71。古典70。英語71。理科73。現社73。
合計500点。

学年順位では丁度良いランクに入っており、Bクラスの特待生として過ごせる範囲だった。

「水谷君はすごいですね。Aクラスの方に混じってランクに入って

いるのですから」

上位をSが、その下をA、Bと続くように大体ランクがついていた。水谷は今回のテストで、550近くで、Aの中に入っていた。

「クラス替えるとAになるということですか？」

「いんや。550じゃまだAじゃないよ。600を取らないとね。だから2学期もB」

「では、2学期も3人揃って同じクラスですね」

「そういうことだな」

楠見は大人しく静かに黙って聞いているものの小さく反応していた。人前では口下手というより、口を閉じている感じで、寮に戻れば結構話したりしていた。

親衛隊避けと本人は言っている。

確かに、寮のような調子で話していればお人好しな彼は親衛隊の言うことなど、断れないだろう。

「さて、これからどうしますか？」

今日は午前中にテストの結果発表があり、半ドンどころか、9時登校後、各個人結果見次第解散ということになっているため終わり。昼からはガラ空きで、町に下りるものが殆どらしい。

「暑そうだけど、町行くか？」

「俺はどうでも」

「僕も二人のしたいことで」

「じゃ、行こうぜ！GRの新作見たいんだ！」

GR・・・・・・とは、Green Reverの略から生まれた会社名。

勿論碧河グループ系列の会社で、発展途上中の会社。ファッション業界から一目おかれており、夏の新作がつい先月に発表されたばかりである。

少々遅い発表だが、案外好評だと報告は受けていた。

「では、一度寮へ戻って用意してから行きましょうか」

「了解！」

水谷はテスト明けにもかかわらず、自室へと走っていった。余程、楽しみなのだろうか。かなり浮かれている。

「GRな」

「ははは・・・・・・少々複雑です」

「だろうな」

苦笑し、複雑な気分のまま足を進めた。

実家系列の店の名前を他人行儀で聞くなど、違和感変わらない。

巷の噂

「暑いですね」

「だな」

「暑・・・・・・・・」

学園前にタクシーを呼んで、町へ降りたった。

久々に感じる外界の空気にテンションが上がる。

喧嘩をする気は無いが、身体を動かしたいという欲望が募る。

初夏とはいえ、気温は25度を越えており、また太陽がジリジリと地上を照らしており熱気が異常だ。

「どっか店入ろうぜ」

「ですね」

「我慢できねえ・・・・・・・・」

適当な喫茶店を見つけると足早に駆け込む。

店内はクーラーが利いておりありがたいほど、適度な温度に調整されていた。

テーブルに案内され、適当なメニューを頼むと暫く黙り込み店内の涼しさを堪能していた。

「あー……何か、すっげえ生き返った気分」

「同じく」

楠見と水谷。椅子の背もたれに首をかけるように二人して同じ格好を取っている。
俺はというと、出された水を飲み、外を眺め、暫く何も考えなかった。

「さて、お目当ての店と他に行くところは？」

「不良の喧嘩の見学」

「んなの何処でやってんだよ。行動時間夜だろ。こんな日中にやらねえって」

「それもそうだな」

「何故、不良に？」

「んー？噂の調査。2年前まで確かに存在していた巷で一番有名な不良“碧”について」

あーそうですか。どうもすみませんね。有名になってしまっていたようで。

2年間ほったらかしであれば噂の一つや二つ流れるとは思っていたが、一般のはずの人間も知っていると結構有名になっていたものだ。

“碧”と“阿修羅”の名。

巷では有名らしく、最強で、総長は綺麗だの美しいだの嬉しくもな
んとも無い言葉を吐き出す水谷に少しうんざりするが、阿修羅の連
中は噂こそあまり流れないものの危険な情報は流れていないという
ことで安心した。

「ねえ、ちよつといい？」

「はい？」

突然見知らぬ者から、話しかけられる。対応したのは水谷で、その
人物は明らかに俺を見ていた。
怪しげな目、探るような眼差しで。

そして、その人物の特徴から俺は記憶を辿り、思い出す。

「あれ？ あんたって、確か阿修羅の……」

「うん。澄月って言うの。んで、悪いんだけど俺が用あるのは彼な
んだよね」

そうして指を指したのは俺。

雰囲気からして相当怒っているように見受けられる。

染められた赤い髪が特徴の彼、阿修羅幹部の澄月^{じようげつ}こと、澄城^{すみしろかなた}奏多。

見た目と名前が反比例しているが、中身は名前と一致するほど静か。だが、本性を引っこ抜くと真っ黒。

「僕……ですか」

「そうそう。ちょっと表でない？」

「まさかの喧嘩？」

「それはありませんよ。一応、彼とは知り合いですので」

「そ？何かすんげえ興味あるんだけど」

「着いて来ないでくださいよ？」

「分かってるよーあとで紹介してくれ！」

「それは構いませんが……」

澄城に引っ張られるまま表に出て、裏路地へと入った。

人目を避けるためだ。澄城の容姿は派手に目立つ。

カッコいいというよりは美人寄り。そんな彼と知り合いである今の俺は周りから変な目で見られる立場である。

「お久しぶりです」

「全く。お前が真昼間から行動しているとかどんな心境だよ」

「今日はちょっと用事があって、偶々だったんです。でも会えてよかった」

俺の前では必ず敬語で、他はタメ。

礼儀正しく、阿修羅の中であまり血の気の無い部類に入る。

澄城は普段、日光を避けるようにして夜行動することが多い。

日光に弱く、日焼けは禁物。肌が弱いゆえに、色々と苦難を抱えて
いるらしい。

「こんな恰好してんのによくわかったな」

「当然です。どのような恰好であれ、俺は間違えません」

「よく言うよ。皆元気にやってるのか？」

「はい。集会の日、恐らく全員集まるかと」

「うわ、マジで？ああ、そうだ。昂にな、重要なことがあるって
言っているんだが連絡はあったか？」

「はい。出来るだけ参加した方がいいと聞いていますが、何かある
のですか？」

全員集まると聞き、複雑な感情を抱く中、一呼吸起き、死刑宣告者
のような気分で言った。

「阿修羅を………解散しようと思う」

もしかしたら、今まで忠義を尽くしてくれた澄城には重い話かもしれない。

予告

最初こそ、中々慣れてくれない牙をむく仔猫のようだった。

澄城奏多。

3年程前、街中で乱闘騒ぎの中心となって袋叩きにされている奴が目に入り止めに入った。

袋叩きにされており、蹴られ殴られの繰り返し。

なのに、当の本人はまるで何も感じてない、何も感じられないように無表情でいた。

人形のような、一切緩まない顔で。

「お前、大丈夫かよ？」

「放っておいてくれても構わない。助けてくれたことには感謝する」

ロボットのようになんと紡がれた意思も感情も無い、棒読みの言葉に落胆する。

自分を見ているようで、嫌気が差した。

「放って置けるほど、鬼畜じゃねえよ」

一言吐き捨て、漸く表情を崩した彼を背負い、知り合いの店で手当てをした。

複数の人数の中、一人で殴られ続けていたためか、傷の上にまた傷があり、酷い有様だった。

ガーゼも、シップも、包帯も、一気に無くなった。擦り傷、切り傷が目立ち見ているだけでも痛い。

だが、本人は自分のことなのにやはり他人のをただ無関心に見ているような表情で顔色一つ変えなかった。

「俺は碧。お前は？」

「澄城奏多。碧って、もしかして阿修羅の総長か？」

「そうだ。たく。お前そんな見た目だったら絡まれるのは当たり前だろ。何で、この時間帯に行動してるんだ」

「昼が嫌いっていう理由。夜が好きっていう理由。他に何かあるとでも？」

「買い物だとか、帰り道だとか色々あるだろ。好きならもうちょっと静かな場所行けよ。おもつきし不良の溜まり場だし」

「目的なんか無いから。ただ、たどり着いたというか、彷徨ってた道が偶々あそこに繋がっていただけ」

「用心しろよ。その見かけで喧嘩できませんじゃ、そこらの奴に喧嘩売ってるようなもんだぜ？」

黙りこくる澄城は、特に考えている様子もなくただじっとしていた。

放浪が好きで、気まぐれ気分屋。猫のようだ。
治安の乱れた地域で放浪しながら立派に在る。

「お前阿修羅入れよ」

「は？」

「阿修羅。俺のチーム。喧嘩をしろとは言わない。俺は阿修羅だと自己主張するのはまあ勝手だ。ただ、仲間になれてこと。条件は一切要らない。ただ、お前の放浪癖をなくすため。その真平な顔に皺を刻むためだ」

「皺？何で？」

「お前笑ったことある？全然皺が浮かばない。表情硬いし、顔の筋肉もピシッとしすぎだし。笑ったほうが放浪癖より楽しいぞ？」

「別に楽しいとかじゃ・・・」

「まあいいや。澄城奏多だっけ？澄でいっか。宜しく」

最初は強引。

まあ、そうでもしなければ厄介猫を笑わすことが出来ない。
会うことも出来なくなる。

簡単に自己紹介をして、連絡先を交換し、阿修羅について語った後分かれた。

不良の集まりとはいえ阿修羅はそこの喧嘩ばかり、縄張りばかりを争っているような連中とは違い、仲間と笑い、楽しみ、人生を面白く生きるために集まる不良の集団であること。

それを澄城に教え、笑うことの楽しさを教えたかった。

俺のエゴかもしれないが、笑ってくれたときは本当に嬉しかったことを覚えている。

そして、笑うようになった澄城は「澄」から「澄月」へと名を変え、阿修羅の中でもムードメーカーとして今に至っている。

よく俺に慕い、仲間と共に居り、特に忠誠心はすごかった。

仲間同士の喧嘩でもいち早く止めに入り、仲裁役として自ら買って出してくれた。

そんな彼だからこそ、やはり「解散」というのは罪悪感がある。

衝動

「な、何ですか？阿修羅のメンバーは全員・・・あんたを2年間待ち続けていたんですよ！？なのに、急に！」

「まあ、ちよつと落ち着けて・・・確かに解散すると言ったが、その後はどうしようと勝手だ。ただ、俺が引退ってのかな。チームを抜けるってこと。阿修羅が無くなるかはお前ら次第。とりあえず俺は解散ということだけを言うておく。俺も高2になったしよ、一応家のこととか、ほんの少し前から行き始めた学校もあるからさ。ああ、さっきのは学校の同級生な」

「俺は・・・貴方が居ない、チームには居たくない。貴方が仕切るチームだからこそ俺が居たい意味なんです。だから・・・辞めないでください」

「いや・・・うん。俺も出来ればやめたくないよ？だけど、やっぱ、親不孝やってるし？そろそろいい頃加減の年だし？家のこともあるし？第一、学校があつて、しかも全寮制。中々来れないんだわ。

そのまま過ぎていって、自然消滅か、バラバラになるのがオチか。どっちかだぜ？」

「阿修羅から抜ける人は居ません。皆貴方が仕切るチームだからこそ居るんですよ？それに、彼らの居場所を・・・考えてあげてください。家に帰りたくない。帰れる前此処に居させてくれというもの。自分らの趣味を否定され、唯一居られる場所。それが阿修羅だって

いう人間も多いんです。だから、彼らから唯一の居場所を取らないであげてください。そして、貴方が何時までもその場所を保持していて欲しいんです。ムリな願いですが、お願いします」

ぱつと頭を下げる澄城。

中々、此処まで発言することが無く、一寸ちよつと関心。

説得力あると思うよ？

居場所が無い人間が寄り添い集う場所。それを阿修羅としているものなんていっぱいいる。

俺が誘い、相手が来て。来るもの拒まず、去るもの追わずのチーム。

「んー……難しいな〜俺が保持か……。ああ、そっか。だったら、昂か、澄か、魁か。何れかの誰かが総長になって、俺がOBの裏方に回って、阿修羅を持っているってのは……。どうだ？」

心が折れた。

澄城が、2年経ってもここまで思ってくれていたということがとても突き刺さった。

そりゃ、個人の思いは沢山あるけど、澄城と俺は似たような顔して、人生送ってきてたから気持ちにはよく分かる。

中々顔出せなくてもいいなら、裏総長的な感じで存在してもいいかな？何て、軽く思ってみた。

「昂さんが総長ですか……。それは、総長がムリなら昂さんも同じことが言えるのでは？」

「あー……。うん。まあ、アイツは暇だろう。生徒会やってる

けど、大学はそのまま進学すると思うし、3年は殆ど学校に来ない時期があるらしいから、いいんじゃないかな。大学だって、色々制度あるから適当にやっちゃえばOKだろうし」

「つまりは昂さんに押し付けたいんですね」

「YES！」

発音よく、言ってみた。

ついでに満面の笑みを加えて。

「総長、笑顔止めてください・・・綺麗過ぎますから」

「いやいや、何言ってるの！？綺麗じゃないし。お世辞もいいところだよ」

「本当のことです。とりあえず、嘘ではないことを自覚して置いてください」

「うん。まあ適当に？」

軽く流され、流し、本題に戻ろうとしたとき人気を感じる。

狭い通路の中で、大通りに澄城、その前に俺が立っている状況で、背後に人の気配を感じるのだ。

「誰だ？」

「よお、久しぶりじゃねえの？阿修羅の猫よお」

「貴様！」

何というタイミング。
最悪すぎる。

再会が早すぎやしねえか？なあ、神様？

神様を信じるとか信じないとかの話なら俺は信じない。
だが、時にはぶっ飛んだ思考回路の中、神に縋ってしまうことだつてある。

俺、自分を詐称している以外……喧嘩以外、何も悪いこととしてない気がするのですが？

「何、珍しい人間連れてんじゃねえの。オタクじゃん」

不意に、動けぬまま体の前に腕を回され、後ろに抱き込まれた。
奴からは野暮ったい前髪と眼鏡で顔がよく見えないはず。鬘を外そうか迷っていた一寸前の俺に感謝。

「あれ、お前食堂の時の奴？」

「僕は存じませんが？」

「輝石の総長、そいつを離せ」

切り替えの早い澄城。

俺が今姿を変え、偽っていることを気にしてか、碧である俺にしか使わない敬語を外してくれた。

有は澄城が俺に対してしか敬語を使わないことを知っているため、一発ではれてしまうであろう。

「ほお。お前とこいつの接点が全くもって分からないんだが、どういう関係だ？」

「す……澄とは小学校の時の友人だったんです。久しぶりの再会で、少し……」

「澄月とお前が？また変な組み合わせだな」

「貴様にとやかく言われる筋合いは無い。今すぐそいつを離せ。でないと腕づくでも引き離す」

「牙を向けるな。別に危害を加えよう何て思っていないし。ただ、お前が珍しいのを連れていたから興味持っただけだ。確か、編入生だったよな？2年の。しかもかなり時期外れの」

顔は見えないが、澄城をおちよくり、ニヤニヤしているのだろう。路地は日陰で、風が通っており涼しいが、引っ付かれるとこの気温では暑く感じる。

何とか、力を使わずに押さえ込まれた身体を開放したいのだが、奴の両腕でがっちり固定されている以上、力以外に使えるものは無い。

「汐音朔羅です。生徒会長でしたっけ？」

「ああ。3年生徒会長の九条有紀。お前面白いな。他の奴とは違う」

「彼らのようにキャンキャンキャン吼えるような容姿をして

いますかね？寧ろそれをどうにかしていただきたいのですが、要望は聞いてもらえるのでしょうか？」

「ムリだな。あれは直ぐ暴走する」

「とりあえず、この腕放していただけませんか？」

「嫌。何か、お前抱き心地いいし。ちょっとだけ」

「いい加減にしてください。暑いんですよ」

そういうと、実力行使・・・ではないが、足を思いつきり踏んでやった。

その瞬間、手の力が緩み俺はすばやく澄の背後へと回った。

「は、いいねえ。俺にそんな態度取る奴初めて。まあ、阿修羅の間以外でな。学園では殆どありえない人種だ」

「如何とでも。僕は貴方が苦手です。なので、近寄らないでください」

「まあいいけどさ。今日は気分がいい分、機嫌もいい。情報に感謝だな」

「情報・・・ですか？」

「ああ。澄月、知ってんだろ？近々阿修羅が集会を行うって。それに前、碧と偶然会ったからな。集会に碧が来るんだろ？巷に噂が広がってるぜ」

誰だよ。広めた奴。

あれ、幹部と、下の人間に全員送信したとはいえ、一応全部他言無用の内容のはずだぞ？

もらすことを一切禁じている。

そうでなければ、何時でも襲ってきてくださいの状況だし。

漏洩（前書き）

前回6Pといいましたが、間違えて5Pのみでした；すみません；

あと、タイトル。

一個例外を除き、2文字で済ましているのですが・・・サブってどうでもいいですねという話。

ということ、これからどうでもいいタイトルです。気にしないでください。その時の気分でつけますので本編とは全く関係ないと思います。

漏洩

「噂は所詮噂でしかない」

「如何だかな？」

本当。そうであってほしい。

集会だって、それほど時間をかけるものではない。

集まり次第、20分から30分で終わらそうとしている。話すことなど殆どないし、俺が後退し昂がとりあえず阿修羅トップに着くだけの話。

「澄、行きましょう。族の関係でしょうが、これ以上拘る筋合いは有りません」

「ああ」

「おい」

「では失礼します。くれぐれも、学校を崩壊させるような生徒会長であらせられませんように」

それだけ言い捨てると、喫茶店に戻り、再び水谷と楠見と合流した。ついでに自己紹介と。

「彼は澄城奏多。阿修羅の幹部澄月の通り名を持っています。僕らと同じ2年生です」

「よろしく」

「俺、水谷省吾。阿修羅の調査中！まさかこんなところで会えるとか感激だ！」

「楠見禾李。同室、同級」

「そ……えっと……」

「朔羅でいいですよ」

総長とあからさまに正体を明かそうとしている澄城が戸惑う様子にフオーを入れた。

本名は初めて教えたと思う。

碧として通している俺の本名を知るものは昂のみだろう。幼馴染である彼だけが俺の本名正体など、殆どの秘密を知っている。

「朔羅とはちょっと前に知り合って、仲良く？なった」

「疑問系は余計ですよ。澄は少々人見知りなので赦してあげてください。彼は條斥じょうせき高校で一生徒として過ごしています」

「條斥？マジ？あそこ、超進学校じゃん。碧河と並ぶくらい。ただ、一般人が行く学校だから、その辺は碧河のが上だって」

「そうなんですか？」

「兄弟校に近い学校だから、たまに交流会をしたりする。朔羅、碧河なんだ。いつか、交流会があるかもね」

「そうですね。その時は宜しくお願いします」

「ん」

控えめで大人しい感じ。

しかし、キレると幾数の人間を薙ぎ倒しあたりを血で染め上げる・・・そのような姿から「鮮血の月」と言われている。

族関係の人間の間で通る、二つ名。

まあ、実際は先ほども流れていたようなと同じく、噂でしかない。ただ、相手が必要以上に突っ込み、自ら自殺行為へと持ち込むものだから当たり所が悪く血が飛び散るのであって、決して澄月の所為ではない。

そして、それが毎回澄月が殴るたびに起こるものだから澄月＝鮮血のイメージがたってしまった。

恐らく、血を流させた数なら俺のほうが上をいっていると思う。

キレれば誰もが敵を殴り倒すのは道理だと思う。

「ああ、そうだ。先程、会長殿にお会いしましたよ。どうも近々阿修羅が集会が開くらしいとかどうとかで辺りを詮索していたらしいです」

「会長がか？へえ。珍しいな。会長自らってか。ってことはあの噂は確かに近づいたのか」

「何です？噂って」

俺の話を手帳に書き込み、なにやら一人で考え込む水谷。それも、表情は真剣そのもの。

「ああ、会長が阿修羅の総長にぞっこんだって言う話」

「・・・・・・・・・・・・・・・・そ、れは無いです。阿修羅の総長は男の方でしょう？会長も男ですし」

「汐音。俺らの学校は？」

「男子校・・・・・・・・ホモの巣窟・・・・・・・・でしたっけ？」

「ありえる話なんだよ。会長自身ホモだから。女は抱かない。阿修羅の総長はすっげえ美人って話だし、輝石の総長、つまり会長と一度ぶつかったって話は聞いているし。一目ぼれでもしたんだろうってさ。現に、ぶつかって以来会長はセフレとの縁を切って今まで誰一人として抱いていないらしい。チワワ共の中で回っている話は二つ。会長に抱かれた！と嘘をこく奴と、会長が抱いてくれない！っていう話。信頼性が高いのは後者」

淡々と今までに取得した情報を纏めて話してくれる水谷。

料理店の後継者になるくらいなら、私立探偵にでもなればいい。

というか、なったほうがいいと思う。

信頼関係とか個人情報とか絶対守りそうだし、外見として普通に観察力に情報力など長けている。

聞いていて、何処から拾ってくるのか疑問に思う。

まるで耳に入ってくる、周りの会話を全て頭にインプットにでもしているかのよう。

「よくも・・・・まあ其処までの情報を得られますね」

「もち！そうじゃないと面白くない！碧河では色んな情報が回っているからね。その一つ一つが興味深い！」

「情報・・・ね。じゃあ、阿修羅の碧が今何処にいるかは？」

何を聞き出すか、澄。

こちらを向いて、少し黒い笑みを零す。

いや、本性が黒いことは分かっているが楽しみたい気持ちが抑えられないらしい。

相手の知らないことを自分が知っていると楽しい気が起こるのは誰でも同じだと思う。

相手が必死こいて得ようとしているものなら尚更。

「二年前に消えて以来さっぱり。死んだとか、消えたとか、病気だとか色んな噂流れてるけど消去法でいくと、消えたというか、連絡がとれない海外とか、その美貌からどこかに連れ去られたとかね。まあ、誘拐監禁の話は無いかな。それだったら警察が動いているはずだから」

「碧は生きている。当たり前。それに誘拐されても無い。直ぐこの町に帰ってくる。ねえ？朔羅」

「何故僕に振りますか。貴方の中での問題でしょう。僕には全く関係ありません」

「面白いじゃん。悪いけど、朔羅を弄るの楽しいから」

ひやひやとさせる。

忠実な犬のようで、たまに黒くなる。敬語キャラなのは相当な時で、

暇な時に黒かったりする。

元々、何かをいじめるということが好きで、自虐行為という危ない線に走ることもあるという危険人物であつたためか。

「悪いと思うなら止めてください。貴方の豹変様は周りから見ると恐ろしいのですから」

「ごめん。でも、彼の情報収集能力すごいね」

「また・・・ですか」

ああ、また澄の悪い癖が出た。

癖と心配

「情報収集能力……ですか。確かにうちには、情報処理に長けたものは居ませんが、彼は一般人です。それに、今此处で話すことでもないでしょう」

「いいじゃん。彼ら面白そうだし」

「貴方のその面白そうの基準が分かりません。それに彼らは一応、会社を所有する家庭で跡継ぎでもあります。何か問題でも起これば大変です。なので、却下です」

「えー。朔羅って、今だけ堅いな。見た目どおり。真面目なのは元からだけど」

「それ以上言いますといくら澄でもその口、潰しますよ?」

「怖いな」

二人そっちのけで、隣に座る澄と話を進めていた。話が見えないと表情に出している二人。

少々、俺も素が出たと反省。

水谷が、不思議そうに、また、興味深そうな視線でこちらにコンタクトを送っている。

楠見は楠見で、苛ついた様子を見せ、何か嫌そうな表情をしている。

「さて、耳汚しも此処までに。この後、如何します？澄は目立つので一緒に行動は止してくださいね」

「俺も朔羅と一緒に買い物でもしたいんだけど」

「嫌です。貴方の顔、結構広まってるんですから。何故夜にしか行動しないのに、昼に居るのかも謎ですし。それに今の時期、貴方は苦手でしょう？だから、さっさと自宅に帰っては如何です？」

「酷いな。まあ、いいけどね。二人に言っちゃおうか？関係ないなら、朔羅のこと知ったら離れちゃうかもよ？」

「貴方は何処まで、僕をおちよくる気ですか？それに、僕が通う学校は不良が仕切るほどなのですから、意味ないでしょう」

「そうかな？」

いつものこのような感じで、おちよくる。
おちよくるというか、悪戯が過ぎる。

「もし、朔羅のことを聞いて離れていくようだったら資格ないし。朔羅の傍に居る」

「あの・・・さ、汐音と、澄城さんの話が見えないんだけど？」

「俺らにも分かるように話してくれ」

とうとう、痺れを切らしたのか、興味の我慢が限界になったのか水谷が口を開き、楠見もそれにのる。
正直、族のことなど話をしたくない。

正当派を貫こうとしている阿修羅でも、所詮社会のゴミと謂われる不良だ。

自分のファッションが故に、不良の外見がコンプレックスの楠見は尚更。

「えっと、その・・・」

「いいじゃん。言っちゃいなよ」

「澄、いい加減に」

「俺は朔羅のために言ってるんだけど。裏切り・・・嫌じゃん」

俺はうつむく。

過去の出来事、一時期とはいえ当時は幼く深く刻み込まれる時。嘗ては笑うことなく、無のままに生きていた澄もまた“裏切り”という恐怖を抱いているのかもしれない。そして・・・。

「壊れてほしくない。昂も、魁も、皆思ってることだよ。本当に大変なんだから」

言葉が出ない。

俺は其処までに脆く、儂く、弱いものなのか？

俺は強くあるからこそ、今に至るのではないのか？

「はは。参ったな。澄、何時からそんなに喋れるようになった？俺に口答えできるようになった？」

「・・・」

「二人が何？俺が何しようと、何を作ろうと勝手じゃん？そうやって、もし失くしたら責任とってくれるの？壊れる？俺はそんなに弱くない。壊れたら誰が俺を治す？誰も居ないじゃん。勝手なこと言わないで。澄の心配性なところ、ありがたいけど、必要ないよ」

「汐音？」

「何、楠見」

珍しく、楠見が俺の名前を呼ぶ。

その表情はとても驚きような顔で、俺が何か可笑しなことでもしかしたかと思うような。

「何を話しているか分からないが、俺らの信頼の話なのは分かった。あと、何で、泣きそうな顔をする？」

「泣く？俺は別に……ただ、澄の心配が過ぎるだけ」

「俺らは信用ない？汐音って何か、不思議な感じするってのは前から思ってたけど、謎なところがまた読めないから何を思って、何を考えているのか怖いんだよね。直ぐに消えそうな感じもあるし」

「そうだね。水谷君、いいところついてる。彼のいうとおりじゃん。私情とはいえ、昂以外に教えなかったし。2年前、急に消えて。またふっと現れて。俺怒ってるんだよ？知ってた？」

ああ。

彼は何と、忠実な犬。

俺のことしか考えていない。俺以外のことなど考えられない。バカ犬。俺の猫。素直に、忠実に。

何故、この俺がこれほどまでに苛つかなければならない。
何故、この俺が言葉を詰まらせなければならぬ。

「暗い話だな。本当。素は出るし、言葉が発せられない。澄、少しは大人しくしてよ。俺帰ってきたばっかだし」

「そうだ！ 汐音、口調変ってるし」

「今更かよ。俺は俺。ただのいい子ぶってるだけの汐音朔羅。本性は不良」

「どういうこと？」

「水谷、お前、不良に興味持ってんじゃん？ 特に阿修羅。んで、碧。俺、それなんだよね」

一瞬、店の店内ごと静かになった気がした。

そう感じられるほど、一瞬が普通の一瞬より長く感じたのかもしれない。

意味が分からなさそうに、呆けてしまっている水谷。
楠見も反応なし。

「阿修羅総長の碧。俺が、碧」

ああ、彼らの答えは？

澄は俺が助けた。

澄は、必要以上に俺に入る。

入り浸り、俺はそれを赦してしまう。

気を

「俺の本当の姿。分かったっしょ？こいつと拘っている理由はそれ。俺が総長だから。不良はあまり好きじゃない楠見はどう？水谷だって、今日の前に居る奴が阿修羅の碧だとわかって、友達以上にそういった関係の情報が知りたいとか思うんじゃない？」

分かってる。

分かってるはず。

俺自身が、自分を……仲間と、友達と、友人と思っている奴を突き放そうとしていることなど。

簡単。

嫌われさせればいい。

元々、浅い関係。同室。前後の席。

狼、ごめん。

俺、いくら経っても子供だ。

高校デビューなど、考えなければ良かった。

大学出ているのだから、就職先など元々決まっているようなものなのだから・・・阿修羅にだけ居て、他は自由に自分がしたいままにして居ればよかったじゃん。

人間を信頼するなど難しい。

来るもの拒まず去るもの追わず。

信頼はあっても、完璧な信頼など。

ただ、興味で。

本当の心などそこにはしない。

俺は・・・本当に子供だ。子供のままだ。体は成長しても、心は・・・。

「汐音って、俺らのことそんな簡単な奴だって思ってたんだ？」

「甘く見んじゃねえよ」

ああ、彼らは。

「お前が初めてだったんだぞ。俺に近づいても、普通に、俺を俺として……楠見でなく禾李の方で見てくれた奴。だから、お前と一緒に居る。お前、自虐行為も程々にしろ。その、澄城の信頼はあるんだろう？俺も同じようにしてくれよ」

「汐音は考えが浅すぎて深い。秘密があるとき、打ち明けない中にこもったまま埃が被って見えなくなっちゃうよ。どんどん積もって、見えなくなつて、分からなくなる。汐音、たとえば、その秘密が、俺らに害があるうと、汐音は汐音。言ってたじゃん。生徒をしかり見ている先生って、金沢のこと言ってたじゃん。俺を俺として見ていて、お前をお前としてみている。汐音は考えすぎなのと、人の心理を甘く見すぎなだけだよ。全てが裏切りの塊とは違うから」

俺は甘い。

誰に？

自分にだ。

自分を虐めつつも、慰める。

そんな俺が、強いはずが無い。人間は傍に誰かが居ないと成り立たない。

逆に言えば、誰かが居るから成り立っているのだ。

気を（後書き）

ねむねむ。

ああ、暗い暗い。

シリアスって苦手。

人間の表情とか、行動とか・・・ほら、何かしらの、会議のような静かな場って嫌いですから・・・。

夢か霧か（前書き）

前の続き。

・ ・ ・ シリアス苦手だけどどろっどろに黒いのは好き。

ほら、昼ドラとか ・ ・ ・ 本当に真っ黒なもの ・ ・ ・ （ふふふふ ・ ・ ・

・ ・ ・

いや、ね？ 人間関係とかの ・ ・ ・ うん。面白いから。

夢か霧か

「良かったね。碧」

「良くねえよ……最悪だ」

愚か。

俺が。

全ての人間があんな酷いわけがない。
全ての人間が悪いわけではない。

ただ、俺の勝手な妄想。

膨らみ、暴走し、そのまま大きくなり続けた結果。

成れの果てがどうなっているかはその人次第。

愚かなのは信頼という言葉が消し去った俺の方。

狼。

どうしたらいい？

止まらない。

涙が、止まらない。

恐らく、今の俺は顔向けできないほどにくっしゃくしゃの顔をして、今の容姿に全く似合わぬ顔で涙を流し、その顔を手で覆っているのだろう。

俺は人を信じない。

違う。

俺に人を信じる資格が無い。

違う。

権利だとか、資格だとか・・・要らない。

思うことが・・・信じるのが俺の出来ること。

出来ることをしていけばいい。

ああ、本当に俺は・・・バカで愚かだ。

「ありがとう」

夢に

想い

成れの果ては

貴方が決める

僕が想ったのは

幻想

だが

実現を果たす

信頼

あからさまな情

た心を

信じることを

そういつ

失くさぬよう

自分を

人の心を

見失わぬよう

人のそばには
人は居る

誰かしら

一

そいつを頼ったって
ったって

見つけて

願

いいんだ

そいつを信じて

夢か霧か（後書き）

・・・・・・あー小説という名の物語という名の詩のようなぶつ壊れた話。

うん。

まあ軽くスルーしてください。

自分も何か壊れた気分。多分アンチ×パラジを聞いたからだ・・・
そうだ。そうに違いない。（※絶対違う）

では・・・・・・続きどうぞ。

幻想と現実

「相変わらず、綺麗に泣くね」

「うっさい。つか、見んなし」

帰り道。

運転手が待っているであろう場所まで4人で歩く。

地味で居る、俺の周りに、赤髪の周りに顔が少々知られている族に属している男、学園で平凡の部類でも麓に下りれば美形の部類に入る男、普通に居ても不良辺りに喧嘩を売ってそうな容姿の男が居り、地味な俺は浮き捲くりで目立つことこの上ない。

先ほどまで流れていた涙は漸く止まったが、その痕は中々消えない。

目をこすれば赤くなるから何も出来ない。

だからといって、それを晒すということもできない。

まあ、大まかは髪と眼鏡で隠れるからいい。

「じゃあ、俺はこの辺で。今度は集会でね。総長」

「は。来なくていいし」

「行くよ。総長に会いに。じゃあね」

手を振り、夕日の方向へ向かい歩いていく男を見送る。

夕日のまぶしさと、影でその姿ははっきりしないが後姿だろうとい
い男というものは何故分かりやすいのだろう。

フェロモン？ 魅力？ オーラ？

何が違うのだろうか。

「俺らも帰るか」

「そうですね」

「あ、戻った」

「煩いです。切り替えなくてはならないのですから」

「何か、不思議だな。ホント」

「放って置いてください」

仲良く在れることを。

幸せに思います。

神でも何でもいい。感謝をさせてください。

「汐音、何してる？」

「えっと・・・あー・・・」

冷蔵庫の中を物色している姿を見れば明らかに変な人。不審者のよ

うだろう。

ただ、此処には俺と楠見しかなくて、楠見は変人がどうのこうのより、目に入っただのは酒を片手に、つまみをあさっている俺の姿。

「酒はほどほどにしろよ」

「あ、うん。楠見も飲む？」

「要らん」

即答する楠見。パーティーの時に気づいたのだが、彼は酒をこの上なく嫌っている。

本人が苦手とするのだろうけど、根は真面目な子であるため法律を守っているのかもしれない。

良く分からないが、よっぽどのがなければ法律などあってないものに等しいと思うのが俺の自論。

だが、良い子は守りましょうという話。

聞かされ続ければいいこと悪いことなど区別がつくようになり、そのまま人生を送るのだろう。

子供の頃に植えつけられた種は中々掘り返し取り除くことが出来ないから。

寝酒を一杯。

すぐに眠りについた。

翌日もまた平凡な日々であることを祈って。

幻想と現実（後書き）

ネタ。

番外編に載せるはずのネタ。

大変だ・・・本編連動の番外編。いや、簡単にさらりとかければ・
・妄想を。

はぁ・・・。

まぁ、いつか書きます。

にしても、今回私にしては結構引き伸ばしたかもしれないです。
このシリアス場面。

3P? 2P?

そのシーンのなりの書いたの初めてなのです・・・恐らく。

では、まぁ、よろしゅうねがいます。

狼の名前が自棄にでていたきがしますがきにせんよおに。
トラウマを一時的に消したのは狼なので・・・。

頭痛とボケ（前書き）

：不定期更新が2ヶ月以上放置：あははは；
さすが、不定期更新だ：；
ということ、こちらも久しぶりの更新です；

頭痛とボケ

「いっつう……飲みすぎた……」

朝、目が覚めてみれば寝酒に飲んだ酒を飲み干していたらしく、しかもそれが2本ある。

すぐに寝たからと言って、その前にどれだけの酒を飲んのか全くもって記憶に無かった。

つまり、このガンガンする頭痛は二日酔いの現れ。

「……………はあ……………」

携帯で現在時刻を確認したはいいが、行かなければならないが行きたくない気にさせてくれる時間だった。

午前11時半。

3限目が終わるころの今、漸く頭痛が治まってきたためベッドから這い出る。

傍から見ればその動きは変人扱いされるだろうが、今は誰もいない。

虚無

空虚

シシとした室内が何時も以上に広く感じる。

何が悲しくて…

何が寂しくて…

人の温もりを求めるのだろうか。

「バカらし…」

シャワーを浴びるため、下着とジャージを引っ掴みだらだらとその短い距離を歩く。

何か、失いそうで。

何か、失くしてしまいそうで。

失った後の後悔。

失った後の存在。

これは俺の…… 「なのだろうか？」

闇に飲まれた心に光が差し込むことはあるのか。
自ら進んで手を差し伸べてくれる者はいるのか。

望み、欲し、探し、求める。

ありのままに生きていても…いいのだろうか。

よく分からん。

シャワーを浴びてから、不在着信を知らせる、携帯の青い光を一瞥し、確認する。

母からであった。

かけ直せば、また色々言ってきたそうだが、今かけなおさなければ後々また色々愚痴愚痴と煩いことだろう。

<もっしもし?>

「母さん、何か用?」

<朔ちゃん! 元気してる? 一度も連絡無いからどっかに拉致監禁

されてるのかと思っちゃったわ！>

「んな阿呆なことがあるか。で、要件何？手短によろしく」

<えっとね、お見合いどうかな〜って思っ>

「……………はあ？」

<向こうの人とね何か気があっちゃって、ぜひうちの息子と！って
言っちゃったの！いい？今度の日曜日に帝○ホテルであるから、絶
対遅れないように！時間は午後6時からよ！その2時間前には来な
さいよ！>

「は、ちょ、え？」

<問答無用！じゃあね！>

ブツンと切れた後、無機質なツーツーと機械音になる。

あの慌しい感じからしてこれから起きるその見合いとやらの騒動に
よほど興奮しているのか、不気味である。

また、嫌なことが起こりそうであった。

頭痛とボケ（後書き）

正直、色々設定が面倒です。

キャラ紹介の人柄とか全部無視した方がいいです。
今更ですが…。

はい。

朔ちゃん、普通にぶっ飛んじゃってますしね。

あかんあかん…

喜悦と逃亡劇

『向こうの人とね何か気があっちゃって、ぜひうちの息子と！って言っちゃったの！いい？今度の日曜日に帝○ホテルであるから、絶対遅れないように！時間は午後6時からよ！その2時間前には来なさいよ！』

母の言葉を思い返す。

……あれ？

「うちの息子？え、男？つか俺も男…見合いとか終わってね？つまり…どういうこと？」

すると、今度は着信表示の青い光では無く、新着メール受信の赤い光。

『ああ、そうそう！いい忘れてたんだけど、“女装”してくること！了解？じゃあ、遅れないようにね♪一秒でも遅刻したら…どうなるか…分かってるよね？』

「……………今なら軽く発狂しても許される気がする」

いや、実の息子に普通、見合いするからって詐称するために女装させるか？

つか、服ねえんだけど？

行かなくてよくね？ない話だが、もしもの場合とかどうすんの？俺は死んでも結婚なんぞしねえぞ？戸籍とか面倒だし、何か縛られる感じがするし。

怠い体に更に重しが押し掛かったように更に怠くなる。

一先ず…寝る…という結論に至った朔羅は、欠席を知らせるためおそらく授業を受けているであろう水谷にメールをした。

次の日曜と言うと4日後である。

それまでに、女物の服とそれなりの用意をしなければ恐らく…面倒なことになることは間違いなし。

どうせ、G Rとか碧河グループの跡継ぎの発表とかするのだろうと予想はつくが、正直してほしくない。

それでまわりの視線が変わったりして厄介なのとか鬱陶しい人間が近づいてくることは目に見えている。

自分の家の財力、権力は大方理解しているつもりだが改めて考えると面倒な家に生まれたものだとか己れの運命を呪った。

「くそ面倒」

ここに来て、口癖に成りつつある“面倒”という言葉。

イギリスにいたときのほうが絶対に楽しかった。

そう言いきれぬだろう。

阿修羅の時も、まわりの目が鬱陶しかつたことをよく覚えている。
単なる暇つぶしの一つでしかなかった阿修羅だが、それでも楽しかったことも覚えている。

笑って、怒って、叫んでは、殴って、蹴って、子供じみた乱闘を続ける。

背には昴がいて、回りには幹部とメンバーが。

「阿修羅は続く…か？」

昴と澄：魁と、あいつら次第か。

ベッドに寝そべりながら過去を思い返す。

情けない、愚かな自分。

仲間に関まれ笑っていた自分。

交友を深め、感情を出すようになった自分。

人は、

絶対に、傍に、隣に、周りに人がいなければ生きてはいけない。

そう。

それが、天涯孤独の身としても、誰かの支えがなければ生きていけない。

つまりは、生きているということは、一人と自分は思っていたとしても絶対に一人は傍に、自分の遠いようで近い場所にいるということ。

「人間は集団と群れをなし生きていく。利用は様々。闇に手を突っ込み、己れを失う者と光を目指し、日々努力と成功を手にし生きていく者。結局は勝者と敗者：勝ち組と負け組に分かれるんだな」

それぞれの人生の謳歌の仕方、それらの生き方が変わる。
時はやり直せない。

人生は一度切り。

それでも、失敗して学習することを良きこととし、力を認める。
一度切りしかないのに、失敗を許され次があるということが認められるなど世界が矛盾しているようで必然である。

わけが分からないのは人間の矛盾した人生。

必然と偶然と矛盾と絶対。

「まあ、人の生きる価値は人それぞれだな」

俺の人生はどういう価値として見られるか。
どのような価値としてみられるか。

親の成功を自分が手にしたように騒ぎ立てる連中は嫌いだ。

己れで総てを手に入れようと努力する奴は好きだが、姑息で卑怯な方法で手に入れようとする者はもっと嫌いだ。

人間は畏怖的存在。

人間は欲望に従順。

はは…

「俺も人間か」

生きて、普通に、時の流れに乗って、何れかは親から与えられる席に座り頂点に立つようになる。

今は、ただ、それを待っているだけ。

喜悦と逃亡劇（後書き）

うーむ。

やっぱ一本通しがいいのか？

話が流れる…

他のとぐっちゃになる…

それでは久しぶりすぎの更新でした★

さらばです！

憂鬱と黄昏（前書き）

あはは。ちよつと今日は黒かな？笑

3ヶ月ぶり…で申し訳ないです；

…年に4回しか更新できないことになるのか？軽く；

憂鬱と黄昏

「つまらない」

ほんとにどうしても。

「面白くない」

ありふれた日常なんて…

「面倒くさい」

人生の終わりがまったくもって…

「まったく…ほんと…面倒」

人生全て…生きてることが…

「…か…」

「か？」

「可愛い可愛い！！！！さっすが私の子ね！！！！女装も似合うなんて！！」

「…母さん…」

呆れる。

呆れてため息すらつけない。

ため息を通り越して呆然だ。

「いい加減にしてよ」

「あら、朔ちゃん。言葉遣いも気をつけなさい？今は貴方は女の子。碧河桜。これから私は桜ちゃんとしか言わないからね？桜ちゃんも女の子として言葉遣いをしっかりね。ちなみに私の事はママね」

「…えー」

「文句は言わないことよ？」

「……黒…」

「あら、ありがとう」

「褒めてない…」

何をして、母にだけは勝てない。

何をして、何を言っても、全てかわす。

最近では軽く恐怖を感じるようになってるし…。

「さて、待ち合わせの場所に…ああ、いたわ！あの方よ」

「……へいへ…い……母さん？どこ？」

「あら、見えるでしょ？目悪くなったのかしら？」

VIP専用か、個室で仕切られ、彩り豪勢に装飾されたその一室に座る青年もしくは少年と、気品溢れる女性。

そして、俺は、片方の男の方をよく見たことがあった。

「こんばんは。初めまして。碧河美奈子よ。宜しくお願いしますね」

「こちらこそ宜しくお願いします。そちらが…桜さん…ですか？」

「は…はじ…めまして…」

「あら、緊張なさってるのかしら？大丈夫よ。そんなに固くならな
いでね。この子もさっきまで待ち遠しくてふらふら歩いてたんだか
ら」

「まあ、本当に色男ねえ」

「ありがとうございます」

何故、これほどまでに意気投合、雰囲気が柔らかいのだろうか。
というか、勝手に見合いなどして、これは政略結婚とか言う奴に近
いのではないだろうか。
ってか見合い以前に、性別を偽ってる時点で詐欺ではないだろうか？

「驚きました。桜さんがこれほどまでに美しく綺麗な方だとは…」

「ねえ、でしょう？とても綺麗よねえ」

「あら、うれしいわね。ね？桜ちゃん」

「…え、えと…あ、の…ありがとうございます」

言葉がつまる。

というか、声が低いことがバレないだろうかヒヤヒヤものだ。
元々、声変わりも、その前と後で変わらないくらいの高さだが、そ
れでも男だ。
ある程度、女子より声が低いことは分かる。

まあ裏声だから分からない…と想いたいが。

「さて、ゆっくり食事でもしてお互いの親睦を深めていきましょうか」

「あら、いいですね。桜ちゃん、好きなものを頼んでいいわよ」

…ぜってえはめる気だろ。

おい。

年頃の女子が好きなものつつたらかなり軽いもんだろうが…。

「何でも好きなだけ、いいのよ？」

「…で、では…あの、遠慮なく…いただきます」

挑発に乗ってやる！なんて、思ひ、メニューを見る。

「あ、じゃあ、カルボナーラ…」

「それだけ？」

「……分かりました…」

適当なものを選ぶ。

本当に…この野郎（母）は何を考えているのだろうか？

「このステーキと、グラタン、たたき…うーん…あ、じゃあ、この寿司と…」

「…ぶっ！あははははは！！！」

「？」

「も…我慢ならないですよ。よく食べるのですね」

「…ご、めんなさい。食欲だけはあって…」

「いえ。とても、いいと思います。最近の女の子は全然食べないですから新鮮で、自分らしさ、個性が溢れてていいですよ」

「あ、えと…はい…ありがとうございます」

「でもすごいね」

「あは…あははは…」

口元が引きつる。

別に…いいじゃん。”好きなもの”、”好きなだけ”だから…。

「ほんと、食欲旺盛で、もうすぐ成長期終わるはずなのに、ちよつとずつ高くなってくんだから。多分父親に似たんですね」

「食べることはとてもいいことだわ」

なぜか…絶賛される。

妙に落ち着かない…。

憂鬱と黄昏（後書き）

食欲あったっていいじゃない！

食欲の秋です。

いっぱい食べますよー！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9158j/>

Last Game

2011年10月17日22時56分発行